

優しさを逞しさを示した十五の春！

難病の少女も出席、築港中で感動の卒業式

助け合って生きる優しさ、困難に負けないたくましさを糧に、それぞれの巣立ち——。三月、区内の各学校・施設では卒業・卒園のイベントが行なわれましたが、このうち十四日に行なわれた築港中学校の卒業式には地元
の難病の少女も出席し、共に最後の「十五の春」を過ごしました。経済格差や受験戦争など社会全体が荒廃へと
向かう中、人間本来の健全な精神が脈打つ光景に心洗われ、その輝きをいつまでも——と願いました。

困難乗り越え、助け合い、師・友・家族に感謝忘れず

卒業式では立石健治たけいしけんじ校長が卒業生七十七名に卒業証書を授与。名刺を呼ばれた各生徒の「はいー！」という返事の元々、校長から一

人ひとりへの「おめでとう」の声掛けの温かさ、音楽科・細井理恵子ほそいりえこ教諭によるバック音楽（花は咲く」「贈る言葉」「蛍の光」などを）

で生演奏なまの美しさが印象的でした。

◆青島野化さんに修学証

このあと、特別支援学校に通いながら築港中

生徒と交流があった築港在住の青島野化さん

(二五)が紹介されました。野化さんが乗る車椅子を男子生徒四人が壇上へ上げ、女子生徒が押して舞台中央へ進み、学校長が「修了証」を手渡すと、式場は大きな拍手に包まれました。

野化さんは生後すぐに、全身の筋肉が萎縮していく「福山型先天性筋ジストロフィー」を発症。小・中学校の九年間、西淀川特別支援学校に通いながら、「居住地域との交流」として、築港小では週一回ほど音楽の授業などに、築港中では定期的に授業や体育大会や文化祭に参加しました。小学校の卒業式には出席できませんでしたが、この日は「三年間交流した友だちと最後の時間を一緒に過ごしたい」との願いが学校側の計らいで叶ったのでした。

◆3年間の成長が凝縮

このあと学校長からの式辞、PTAからの祝辞、在校生からの答辞、卒業生保護者からの謝辞など、いずれも心のこもった言葉が続きましたが、中でも注目を集めたのが、卒業生を代表して森奨太君と大石美優さんが朗読した答辞でした。それは大要次のような内容でした。

←交流した青島野化さんに修了証を贈る立石学校長(右)、感動を呼んだ答辞の朗読①



「一学年では一泊移住のお風呂で一気に繋がりが深まった。まとまりが出てきた一学年では職場体験で働くことの大変さ、楽しさ、役立つ喜びを感じ、将来を考える機会となった。三学年での修学旅行では都会では味わえない泥まみれの田植え体験やホテルでのゲーム大会が楽しかった。体育大会では、最初は恥ずかしかった南中ソーランや、難度の高い組体操に挑み、怒られながら何度も練習して皆の気持ちが一になった。失敗もあったが練習以上の出来もあり、達成感と感謝で一杯になった。文化祭では自分たちで一から台本を作り、本当に完成するのか不安を抱えながら練習した。田陣を組んで

本番に臨み、完璧ではないが最高の舞台が作れた。部活では先輩に優しく教えてもらいながら楽しく活動できた。三年になつてうまくやれるか不安もあったが、仲間がいたから乗り越えられた。大好きな友だちや先生と一緒にずっといたい。自分の足で新たな一歩を踏み出す。辛いこと、苦しいこと、思い出や学んだことを糧に乗り越え、成長していきたい。在校生へ。その時できることを精一杯やれば乗り越えていける。築中を素晴らしい学校にしてほしい。先生へ。遅くまで教えて頂き相談にも乗って頂き、心から感謝します。友だちへ。辛い時にも寄り添い助け合った。会ったらまた笑い合おう。家族へ。間違った方向へ行くとした時に戒めてもらった。その時は反発したが、あとで意味が分かった。こうした多くの方の支えで最高の中学校生活を送れたことに心から感謝したい。目標に向かっての協調と団結、困難を乗り越える勇気とたくましさ、より苦難にある者への優しさで助け合い、師や友や家族への感謝の気持ち——三年間の心身の成長が凝縮された文面を、時に涙でつかえながら読み続ける姿に、会

場はしばし熱い感動に包まれました。

◆サプライズ合唱に感動

そして式終了後にサプライズ(思わぬ出来事)が待っていました。卒業生全員が突然立ち上がり、「僕たちの歌を贈ります」とレミオロメンの「三月九日」を歌い出したのです。肩を組んで叫ぶように歌う男子生徒、感涙で俯いたままの女生徒。車椅子の野花さんも一緒に歌います。戸惑いながらもこの光景を心に焼きつけようとするかのように見つめる先生たち。歌い終わった生徒の「三年間お世話になりましたー」の声で会場の感動は最高潮に。ある教師は「練習しているのは知っていましたが、まさかこの場でやるとは…」と頬を紅潮させていました。

このあと卒業生は、在校生の吹奏楽演奏や保護者の拍手を受けながら廊下の「花道」を通り抜け、通い慣れた学校を後にしましたが、近くの築港南公園でも自然発生的に集まりが持たれ、野花さんを囲んで『贈る言葉』を合唱するなど、時間の経つのを忘れて別れを惜しんでいました。

◆濃い友情が二番の思い出

卒業生保護者のうち中馬知恵子さんは心さ

←先生たちを感激させた卒業生のサプライズ合唱。車椅子の野花さんも一緒に歌った



んの母親。「式の全部が良かったですが、特に最後のサプライズの歌に感動しました。娘は『二年生の体育大会では難しい組体操に挑み、一生懸命練習したのに本番では上手くできず、悔しい思いでしたが、そんなことを通じて、とても濃い友情が生まれたことが三年間の一番の思い出

出。それだけに別れが辛い』と言っていました。その横で父親の男性は「無事に卒業できるだけで…」と感無量の面持ちでした。

◆野球の夢に向かつて

同じく保護者の政所裕一さん・まゆみさん夫妻はついさんの両親。「娘はとても充実した三年間だったようで、卒業したくないと言っていました。一人っ子で、小学時代から地域の野球チームでプレーしていましたが、中学では学校側と交渉して二年生からクラブに入れてもらえ、レフトを守っていました。勉強との両立は大変だったと思いますが、よく頑張り、目標だった鹿児島神村学園高への入学が叶い、とても喜んでいました。これからも野球という自分の夢に向かつて頑張ってほしいと願っています」。

◆共に成長した3年間

また、修了証をもらった青島野花さんの母親・沢美さん(四〇)は「娘は他の生徒さんたちと一緒に最後の時間を過ごせ、とても喜んでいきます。表情が全然違つので分かります。三年間では体育大会と文化祭が心に残っています。二年生の体育大会ではムカデ競走に野花が

急遽参加することになり、先生が車椅子に紐を付けたらしてサポートして下さいましたが、ぶっつけ本番だったため、紐が引つ掛かったり

して野花の組は滅茶苦茶になり、負けてしまいました。野花も私も落ち込みましたが、生徒さんたちは『練習したら勝てるはず』『もう一度やりたい』と励ましてくれました。文化祭でも野花のために『ボンポンを使おう』とアイディアを出してくれました。先生に言われてやるのではなく、自分たちで話し合い考えてくれたこと、そのことを通じて野花と生徒さんたちが一緒に成長できたことが何より嬉しいですね。地域との交流はこれが最後になり、四月からは西淀川特別支援学校の高等部に在籍しますが、この三年間の思い出は野花の人生にとってかけがえのない宝物になるでしょう」と話していました。

その傍で野花さんは、友だちから贈られた色紙の端を大切に握りしめていました。それらには「のちゃんへ 音楽の時間や体育大会など楽しい時間をありがとう また会おうね」「文化祭の時、ダンスめっちゃかわいかった」「体育大会とかも一緒にやれてよかった♪」

←公園で野花さんとの別れを惜しむ女生徒たち

㊤、野花さんを囲んで歌う男子生徒たち㊤



「ありがと」「無理しないように頑張つてね」「困ったことがあったらいつでも呼んで」「小学校からの九年間、一緒に過ごさせて楽しかった」などの言葉が記されてありました。

◆辛さ乗り越え期待に応えた

卒業生のうち公園で友だちと名残を惜しんでいた大西悠希君は「今日の最後の集まりで千葉先生が『このころ君たちがバスケットでタンクシュートを決めている夢を観るんや』と話されたのを聴いて『僕たちのことを最後まで気にかけてくれたはるんや』と感激しました。一・二年生では陸上部で砲丸投げや走り幅跳びをしていましたが、その練習で培った瞬発力を貰われ、

三年生で急にサッカー部のキーパーにスカウトされた時は戸惑いました。が、夏休みの練習の辛さなどを乗り越えて期待に応えられたのは、とてもいい思い出です。成績が悪い時は辛かったですが、頑張つて目標の高校に合格できました。父が商社に勤めているので、将来は自分も商社マンになりたいと思っています」。

◆言葉の壁乗り越え通った

同じく卒業生の高比良旭君は「僕は中国福建省の生まれです。最初は姫路にいましたが、中学一年の途中から港区に住み、築港中に転校しました。言葉が通じなくて、友だちから『話じらい』という態度を示された時はとても辛かったです。だんだんと「コミュニケーションをとれるようになりました。でも、やはり言葉が分かりにくいので、授業はどれも難しかったです。体育も苦手でした。でも修学旅行は楽しく、文化祭で小道員係をしたのも良い思い出です。四月から公立高校に通いますが、うんと勉強して、将来は通訳の仕事に就けたらいいなと思っています」と話していました。

あさやけ

「日本はWBC三連覇を逃^{のが}しました」「ええ」「ええ」。三月十八日夕、NHK関西ニュースの報道が信じられず、何度も叫んでいました。妻は「どうでもええやん」と笑っていましたが、試合はその晩に始まるとはかり思っていた（実際には朝からやっていた）ので、いきなりの結果通告に意表を突かれた戸惑いもありました。その夜は「日本の一流打者が何で一点しか…」「あの重宝失敗がなかったら…」などが頭から離れず、寝苦しい中、「関西ニュースで世界の二ノースをやるはずがない。これは夢や」と信じてました。が、翌朝の新聞に現実を突きつけられ、ようやく 観念 しました▼興行収入の大半が大リーグに流れることや、にも拘^{かか}らず米球界が代表チームへの熱心でないなど、問題含みの大会ではありますがそれでも緻密^{ちみつ}で美しい日本野球がパワー主体の外国野球を凌^{しの}いで「世界ナンバーワン」の称号を受け続けることには大きな誇りを感じてきたので、それが

途絶えるのは耐えられない思いだったのです▼かつて吉田兼好は「無益^{むやく}のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事^{ひくじ}する人ともいふべし」（徒然草^{とてなそう}）と語りました。人間は不完全ゆえ、自算することなく、大して価値もない物事に没入し、限られた人生を浪費してしまつことがよくある、という自戒を込めた警語です▼確かにWBCはそれなりに魅力あるスポーツ祭典であり、そこでの日本選手の高度なプレーを楽しみ、また応援するのは悪いことではないでしょう。が、大事なものはその 程度 。「何事もほどほどに楽しむ」といつ心の「コントロールを忘れたらあかんあ」と肝に銘^{めい}じた次第です。山本監督やマエケンらの「メントを何度も何度も読み返しなから…」それがアカンちゅうに。

× × × × × ×

テレビ大阪で懐かしいの歌謡番組を観ていた妻が、三十代の加山雄三と六十代の筆者を見比べ「やっぱ違^{ちが}いちゃう…」とわんわんやうらハハハ。鷹揚^{たうやう}に笑い飛ばしましたが、内心「比べる」と自体おかしいやろ、そついつあんなはどないやねん、三十代の吉永小百合と比べて」と反発を

感じていました▼それはともかく、永遠の若大将・加山雄三も、永遠の清純派・吉永小百合も、さらにはミスター・P・S細胞・山中伸弥教授でさえも、老化と死は自然不可避。にも拘^{かか}らず、せつせとスポーツジムに通つたり、サプリメントを採^とり入れたり、現代人は実に「プンチエイジング」に熱心です。美容や健康に繋^{つな}がることでもあり、特にそれ自体を悪いとは思いませんが、この点でもやはり 程度 が問題でしょう▼聖書には「白髪は…美の冠である」（箴言^{しやうげん}）とあります。歳相応の容姿こそ美しい、実際より若く見せようと躍起^{えつし}になる必要はないという戒めです。また「あなた方の飾りは…外面のものであつてはなりません。むしろ…心の中の秘められた人を飾りとしなさい」（ペテロ第二）ともあります。確かに心こそ、朽ち^{くち}ぬけない、むしろ死の間際まで成長や若返りが期待できる唯一のもの。それに焦点を合わせた人生こそが真に安定した人生といえるのではないしょうか。その点からすれば、冒頭の筆者の心の中は、ちょっと品^{ひん}がなかったかなと反省しています（けどやっぱむづかしいなあ）。

障害に負けず心身成長

肢体不自由児通園施設で卒園式



→訓練で得られた心身の成長に保護者らの感慨が込み上げた「あさしお園 卒園・退園式」
3月21日朝 夕風21日の「あさしお園」で

訓練で得られた心身の成長に、保護者らの感慨が込み上げました。三月二十一日、肢体不自由児通園施設「あさしお園」(夕風21、社会福祉法人「愛徳福祉会」が運営)の卒園・退園式が行なわれ、参加者に深い感動を与えました。

◆一人ひとりの成長だたえ

式では、今春から市内の特別支援学校などに進む卒園児四人、同じく市内の保育園などに進む退園児十一人が、保護者に抱かれたり、車いすに乘せられたりして入場。山村貞行園長(たけむら)から「療育証書」や「療育記録」が手渡されました。その際、「フランクができるようになったね」「大阪井が得意だったね」「アンパンマンがいれば元気だったね」など一人ひとりの成長や個性を讀めた園側のコメントが温かく、参加者の笑顔と拍手を誘っていました。

山村園長は挨拶の中で、「みんなよく頑張りました。皆さんがいなくなつて寂しくなりますが、素敵なお兄さん・お姉さんに成長するためにも新たな出会いと経験を積んで下さい。苦しいことがあつても一緒に励んだ仲間を思い出して乗り越えて下さい。保護者の皆さんへ。まだ成長

半ばの子供たち。その背中をもつ少しだけ押してあげて下さい」と呼びかけました。

◆「入所よりも在宅」を理念に

あさしお園は一九七八年、社会福祉法人「愛徳姉妹会」(のちに同会から「愛徳福祉会」が分離独立し、運営を引き継ぐ)が国と大阪市の援助を得て開設。市内に三つしかない肢体不自由児通園施設の一つ。主に運動発達に遅れや障害のある乳幼児一人ひとりに、保護者にも通園してもらいながら、作業療法士、理学療法士、看護師、保育士、ドクターなど各分野の専門家がチームを組み、様々な訓練機器を駆使してリハビリテーションや保育を提供しています。併設の「ゆつなぎ園」は同様の経過を経て開設された。府内でただ一つの難聴幼児通園施設。西園ともこの分野の草分け的存在で、「入所よりも在宅」を理念に通園療育の優位性を逸早く掲げて実践を重ねてきました。平成十八年から障害者自立支援法が適用され、利用者負担が増大するなど経営環境は格段に厳しくなりましたが、職員懸命の努力で運営が続けています。

世の荒波に負けるな！

港南中同窓会 入会式で木村会長

「高校でも社会でも荒波に負けるな」。三月十二日、港南中学校（東邦裕校長）で、卒業を控えた三年生の「同窓会入会式」が行われ、新たな門出を祝福されました。

入会式は朝九時から体育館で行なわれ、同窓



→「世の荒波に負けるな」技術や資格を身に着

けよう」と卒業生を励ます港南中学校同窓会・

木村良雄会長は3月12日、港南中体育館で

会を代表して木村良雄会長（一期生、六十二歳、田中在住）が出席。卒業生百九十七人に記念品（ボールペン）を贈ると共に、はなむけの言葉を述べました。

◆技術や資格を身に着けよう

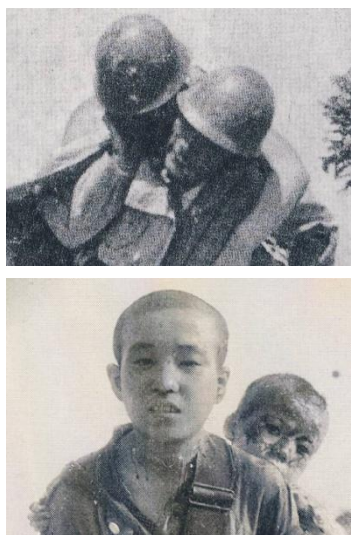
この中で木村会長は「四十九期生の入会を心から歓迎する。港南中はかつて荒れた時期もあったが、その後の先生方の努力や地域の協力で健全な校風が築かれた。それでも油断することなく、卒業しても、喫煙など心身に良くないことからは遠ざかるように。また高校には同じレベルの生徒が集まるが、そこから格差が生じる。社会に出ても同じ。大学を出たら何とかなる時代は過ぎた。終身雇用も年金も当てにならない。まさに荒波への船出。そんな中でこれから、生きていくための技術や資格をしっかりと身に着け、苦しい時には忍耐と自立の精神を忘れず、それぞれの個性を発揮して歩まれることを心から期待する」と生徒らを激励しました。

なお木村会長や東校長によると、学校の同窓会が「入会式」という行事を実施するのは全国的にも珍しいことでした。

催しガイド

■大正区「原爆と戦争展」 平和な未来のため、

①第一次世界大戦の真実②沖縄戦・全国空襲の記録③原爆と峠三吉の詩などの写真パネルを通じて、日本の現状をもたらしした原爆と第二次大戦の真実に迫り、被爆者・戦争体験者の平和への思いを伝える。土曜日、五月十一日（土）、十二日（日）の十七時、大正区「ミニメディアセンター」（大正区千島一六・一五、市バス「大正区役所前」の二階第四・五会議室で。入場無料。主催は大正区原爆被害者の会、大阪原爆展を成功させる会（☎六三二四・二八四二）。



→中国戦線で負傷兵を背負って進む日本兵④と

原爆投下直後の長崎で負傷した弟を背負って

肉親を捜す兄⑤いずれも展示写真から

■緑の地球ネットワーク(GREEN) 中国山西省

大同市の黄土高原で一九九二年から緑化協力を続ける認定特定非営利活動法人。地球環境のため国境を越えて力を合わせている。①黄土高原スタディツアー「黄土高原を訪問し、緑化協力の成果を観察し、村人と交流し、失われた緑を取り戻す試みを体験できる恒例イベント。次回は八月二十四～三十日(八泊七日)。費用は十七万円他(昨年実績)。定員約三十名。詳細未定

②DVD『黄色い大地に広がる緑』草の根環境協力の二十年』「緑化協力二十周年を記念して制作。一九九二年から、政府間関係の如何を問わず、日中人民の友情と協力で、数々の失敗を乗り越え活動してきた軌跡を辿る。約三十分。無料。」「ピー可▽GEN自然と親しむ会」「初夏の植物園を歩こう」をテーマに五月十九日(日)十時十五時頃、前中久行さん(元大阪府立大学大学院教授、GEN代表)の案内で、大阪市立大学理学部附属植物園を観て回る。十時に京阪交野線「私市」駅前集合。小雨決行。参加費は大人七百円、子供三百円(保険料含む)。高校生以上は別途入場料三百五十円必要。持ち

物は飲み物、弁当、歩きやすい服装・靴・雨具など。申込締切五月十五日(水)▽いずれも詳細はGEN事務所(市岡一・四・一四・五階、☎六五七六・六二八二)へ。

■海の写真コンクール 海への関心を高めるため「海の日」(七月十五日)に向けて毎年実施。三十五回目。海運・造船・港湾・湖・川・魚など広く海をテーマにした写真を募集。カラープリント四ツ切(ワイド四ツ切を含む)又はA4サイズ、いずれも平成二十四年七月一日以降に撮影した単写真に限る(合成や変形で事実と異



→昨年コンクール市長賞の古住和彦さん(港区)の『サンプリング入港』④と、入選の船戸章さん(港区)の『微速前進』④

なる加工は不可)。六月十七日(月)必着。近畿運輸局長賞、大阪府知事賞、大阪市長賞など入選三十点。発表は七月上旬。展示は七月中旬～八月中旬に海遊館エントランスビルで(上位十点のみ。全入選作品はHPで閲覧可)。応募及び詳細は主催の近畿海事広報協会(〒552-0021 大阪市港区築港二・七・一五港振興ビル204号室、☎六五七三・六三八七、HPアドレスは<http://kinkikikai.j-sakura.ne.jp/>へ。

■ムチ打ち(省・腰)無料相談会 交通事故でムチ打ちになった被害者を対象とした無料相談会。四月二十八日(日)十時十八時に行政書士のむら事務所(築港二・七・一六〇〇)で。一人約一時間。事前予約制(電話かEメールで。「どついたら正当な補償が得られるかをアドバイスします」「事故後、早めの相談が良い結果につながります」(同事務所・野村光恵さん)。Eメール: info@jikkou10-nomura.com、TEL:六五七六・六〇七八、FAX:六五七六・六〇七九。

安否確認などに課題

田中連合が「津波避難訓練」



→津波避難訓練の経験を交流する地域振興会田中町会連合会の人々。成果と共に課題も見えた11月3日朝、田中会館（田中）で

各地域で防災訓練が繰り返される中、成果と共に課題も見えてきました。三月十七日（日）朝に取り組まれた地域振興会田中町会連合会の「津波避難訓練」では、安否確認の在り方などを今後の課題に挙げた町会が目立ちました。

◆安否確認、避難ビルへ

訓練は「午前九時に南海トラフを震源とするM9の地震が発生し、津波警報も同時に発令され、一時間後に津波が大阪湾に到達予定」との想定で行なわれました。

このうち田中三丁町会では九時過ぎに田中三丁町会館前に約三十人が集り、全十一班の各班長は直ちに安否確認に回りました。ある班長は会員十三世帯と非会員八世帯を回り、玄関のドアノブに括り付けたタオル（無事の目印）などで安否を確認し、南会長に報告。同会長は各班の状況を集約しました。

これを受けて九時十五分、同会長や野村防災リーダーを先頭に、津波一時避難ビルである阪神高速道路公団の建物（石田）へ向かいました。が、休日では入らず、この建物が「津波一時避難ビル」として登録されていないが、緊

急時に利用させてもらうことを既に交渉済みであることを伝えるに留め^てました。

◆各町会の経験を交流

このあと役員・班長や希望者は田中会館（田中）へ移動。他の町会と合流し、「経験交流」が行なわれました。これには約百人が参加。主に次のような経験が語られました。

「タオルが九軒にはかけてあったが三軒にはなかったで、直接声をかけて安否確認した」「タオルがかけてあったのは七・八割だったが、前回のデータを生かして確認した」

「家に何人住んでいるのか、客や友だちが来ているのか、などの確認も重要だと分かった」「日本通運やドンキホーテなど交渉し、一時避難建物としての使用に了解を得た」

◆悲観的に想定し、楽観的に準備を

続いて大阪市危機管理室の担当者「地震津波を正しく恐れる」と題して講演。スライドを使って、①地震・津波のメカニズム②南海トラフ地震での被害予想③情報入手の大切さなどを示したあと、「港区は三方を水に囲まれ、田中地区の標高は〇・八メートルと極めて低い。満潮

位一・二に津波高三メートルが加わると波高は五・

「三メートルにもなる。液状化も発生しやすい。こうい
うことを知って対策を考えることが大事。悲観
的に想定し、樂觀的に準備しよう。釜石の奇跡
のように、訓練の積み重ねで状況に応じた判断
ができるようになる」と呼びかけました。

◆「一時避難施設」などで質疑応答

講演のあと参加者市・区との間で主に次の
ような質疑応答が行われました。

「サイレンがどんなものが分らない」↓「実
際には聴き取りにくいかもしれないので、テレ
ビやラジオや携帯電話を重視するように」

「一時避難施設はどこにあるのか」↓「マッ
プに出ている、区役所のHPにも出ている」

「田中小の三階以上が一杯になったらどうす
るのか」↓「小学校は収容施設。一時避難施設
は別にあり、登録されていなくても町会長が交
渉して受け入れてくれる建物もある」

「車の避難はやるように徹底すべき」↓「そ
の通り。避難は必ず徒歩で」

「三階以上の目安となる標高五メートルの目印を電
柱などに付けたらいいか」↓「検討中」。

← 安全確認に回る女性班長のひと、安全確認情報
を集約する町会長の「田中三丁目」で



終了後、参加者には救助ホイッスルと乾パン
が配られました。

◆ 早朝や夜中にも訓練を

参加したある男性は「警報サイレンを知らな
い人が多いので、訓練では鳴らすべき。緊迫感
も高まる。講演では港区や田中の状況が具体的
に分かり、行政はここまで調べてくれているの
かと感動した。地域の人が集まって行政の話を
聴くのは良いこと。災害は時を選ばないので、
今後は早朝や夜中、休日にも訓練したらよい」。
ある町会長は「会員・非会員を問わず全世帯
にお知らせを回したが、タオルをかけていたの
は八割ほど。安全確認できない世帯もあった」。

車椅子利用者もおられるが、訓練には参加され
なかった。「この辺を考えていきたい」。

ある班長は「町会員はタオルをかけていたが、
非会員はかけておらず、安全確認できなかった。
顔を知らない人もおり、いざという時、不安だ」。

◆ もっと準備と工夫を

ある女性会員は「集合場所ではぼーっと立つ
ているだけで、移動や解散の際もこれといった
説明がなく、せっかく集まったのにもったいな
いと思った。役員の努力には頭が下がるが、も
う少し工夫や準備をしても良かったのでは」。

ある男性会員は「防災訓練は積み重ねに意義
があり、その意味では良かった。ただ全体に緊
迫感がなく、成り行き任せの感じを受けた。市
危機管理室の話は、内容は良かったが、長くて
疲れた。参加者の質問も、一時避難ビルと収容
施設を混同したものがあ、まだまだ基本的な
防災知識が行き渡っていないと感じた。最後の
ホイッスルや乾パン配りでも、ちょっとした説
明があれば意識も高まったはず。成果と共に問
題点も整理して今後に生かしてほしい」と話
していました。

赤バスありがとう

復活願い 利用者が感謝の花束



→「赤バスさん、安全に、親切に運んでくれてありがとう」と運転手に感謝の花束を贈る利用者の女性ら
 3月29日朝、井大町バスターミナルで

「赤バスさんお年寄りや障害者や赤ちゃん連れの母さんを安全に親切に運んでくれてありがとう」。赤バス廃止を目前にした二月末、利用者が復活を願って感謝の花束を贈りました。

◆「ありがとう」と運転手に

三月二十九日朝には港区役所前や井大町バスターミナルで、三月三十一日夕刻には港区役所前で、それぞれ利用者数人が「赤バスさんありがとう」の横断幕を掲げてバスを出迎えると共に、運転手ら市の担当職員に花束を手渡ししました。受け取った運転手の男性は「ありがとうございます」と感謝無量の面持ちでした。

このイベントを企画したのは赤バスの存続を訴え続けてきた「赤バスの存続を求める港区連絡会」（石井ひさ子代表。その呼びかけに応じて参加した一人、中道元栄さん（七四）（八幡屋3）は「膝が悪く、他の病気もあって、週に四回、磯路の診療所に通っています。一番近い市バスの停留所（港晴）までは二十分もかかりますが、赤バスの八幡屋三丁目停留所までなら二分なので、いつも利用しています。運転手さんが皆とても親切です。膝が上がりこく、乗

る時も降りる時もエアーを落とし、床を低くしてくれるので助かります。乗客の皆さんも苦労が分かり合えて親切。お陰で命をつないできたようなものです。今日は最後の便といつので、運転手さんにどうしてもお礼が言いたくて来ました。明日から一年間は口交の青いバス。低床でないなど心配もありますが、ほぼ同じコースを走るのでひと安心です。その先、できれば赤バスが復活してほしいと願っています」。

同じく参加した浜口幸子さん（七四）（波除3）は「この間まで検針員で走り回っていたのに、今は杖を頼りにしか歩けません。乗り込むのも難儀しますが、赤バスなしにはどこへも行けず、お医者さんに買い物に、しょっちゅうお世話になっています。隣のバス停に行くのにも利用するほど。どうしても運転手さんにお礼が言いたくて、最後の便に乗りました。感動して涙が出ました。明日からの青いバスに波除も何とかつなだったので、本当に嬉しい。来年はどうなるか不安ですが、またみんな頑張つて赤バスに復帰してほしいです」。また浜口さんの孫は、赤バス運転手に贈った寄せ書きに「おじ

いちちゃんばあちゃんを助けてくれてありがとう。小四の時、『赤バスなぐさないで、おじいちゃんおばあちゃんを困らせないで下さい』とアンケートしました」と書いていました。

◆「福祉バス」としてスタート

赤バスは「採算が悪くても市の助成によって支える福祉バス」(大阪市)「ミニミニ系バス運営補助金交付要綱」の理念のもと、市交通局が「一般の大型バス路線ではカバーしきれない地点をきめ細かく結ぶ地域密着型のバス」として二〇〇二年一月に本格運行を開始。高齢者や障害者の移動手段として重宝され、〇六年には市内全区の三十一路線で運行されていました。

反面、ルート設定の問題や乗車時間の長さなどから利用は伸び悩み、「利用の低迷」を理由に、市は一旦二〇一〇年度末に全廃の方針を出しました。が、利用者の声などを受けて「改善と利用促進に取り組み、キロ当たり乗車人員二・二人の目標を達成できたら存続」と方針を変更。一二年十月～一三年三月をその検校期間としました。が、その途上、就任した橋下市長はすべし「赤バスはリセット」と言い、「存廃の

↑2002年から「福祉バス」として活躍してきた「赤バス」(上は旧型、下は新型)



判断は新区長に委ねる」と表明。昨年九月、全二十九路線のうち二十八路線(港ループを含む)を今年三月末で廃止すると決めたのです。その上で市は各区に対し「地域で本当に必要な移動手段を検討するように」と指示しました。

◆4月から「青バス」に

一つした経過を受けて港区では、赤バスが廃止されるこの四月からの対策として「民間事業者への運行業務の委託」を計画。公募にあたっては「創意工夫を活かした企画提案をして下さい」と呼びかけ、特に「走行エリアについては「バス停留所から遠い池島・八幡屋エリアは必ず運行」コースに入れるように「今の利用状態が

ら見てニーズの高いエリアは入れるように」との条件を付けました。

その結果、港区では日本交通株式会社(弁天、☎六五七一一・二六二)が年間総事業費二〇九五万円で運行業務を引き受けることになり、一日から小型バス「港区ループバス」の運行が始まりました。運行責任は委託者である港区役所(総務課区政統括グループ、☎六五七六・九九三)が持ちます。

車体は青色。運賃は赤バス時代と同じく百円(子供半額、敬老バス利用可)。定員一十七人(正座席十一、補助席六)。車椅子での乗車はできませんが、折り畳みでの乗降は運転手の補助で可能。八時～十九時半に九便。運行ルート・時刻表は港区役所が発行。赤バス時代の七停留所(南市岡三丁目など)が廃止されています。

◆好評のスタート

「青バス」初日の四月二日、午後二時台の池島・八幡屋付近では概ね五十分遅れで運行。「八幡屋二丁目」で降りた六十代女性(池島)は「赤バスはいつも郵便局へ行ったりするのに利用していました。今日から青バスになると聞

いて、少し不安もありましたが、乗務員さんが二人いて、停車したら一人が降りて乗降を見守ったり介助して下さったりと親切でした。『次降ります』ボタンの位置が高いこと、手押し車の置き場所がないことなどが気になりましたが、乗務員さんが声をかけたりしてカバーして下さいました。ひまます安心です』と話していました。

◆他の区はどうしているか

一方、他区でも港区と同様、いったん赤バスは廃止されましたが、四月からの代替手段を講じた区もあれば、そうでない区もあります。例えば、①淀川、城東、平野、西成、住之江の各区はジャンボタクシーの運行を四月から民間委託②東淀川、鶴見、旭、都島、阿倍野、西淀川の各区は港区と同じく小型バスの運行を四月から民間委託③天王寺区は平成二十六年から民間委託先を選定中④生野、住吉区は「調査中」⑤北、福島、東成、中央、浪速、西の各区は代替手段なしなどです。

◆公営とあるべき姿

一つした経過とその後について、「赤バスの存続を求める港区連絡会」では次のように評価点と

←初日の「青バス」。停留所とくに乗務員1人が降りて利用者を車内へ案内していた（4月1日午後、「八幡屋」丁目「バス停」で）



問題点を指摘しています。

「市が負つべき責任を振られた港区長が、赤バス利用者の実情と願いを受け、様々な制約のもとで努力し、一年限りとはいえ、赤バス港ループとはほぼ同じコース・バス停で運行できるよ

うになったことは大変嬉しい。ほぼ空白が生じなかったことには感謝すると共に、赤バス代替にふさわしい内容のバスにと願っています」

「とはいえ、この民間委託は来年三月末まで。その後はどうなるのか。府市統合本部が港区の頭越しに示した『二十八年以降の港区の路線案』では、波除エリアが空白になり、池島・八幡屋エリアからも区役所など区中心部に繋がらないなど問題だらけ。これは民営化が計画されているバス路線の利益を妨げないという、区民の必要とほかけ離れた方針から出たもの。そうではなく、来年度以降は現行ルートを確保した上で、より利便性を高める改善が必要で、」

「交通弱者を支える福祉的な赤バスはもちろん、地下鉄も市バスも一体で整備され、全体で黒字の市交通は正に市民の歴史的財産。公共の責務による公営こそがあるべき姿です。橋下市長はそれを採算性で選別・解体し、採算部門は民営に、それ以外を廃止・削減・委託化して公的な責任を投げ捨てようとしており、許せません。『地下鉄・市バスを民営化するな』『赤バスを復活させよう』の声を大きくしていきたいです」

働く者の医療を再び

「南労会」争議が和解で終結



→松浦診療所に対し「働く者の医療を守れ」「組合つぶしをやめろ」と22年間闘い続けてきた労働者。3月11日、并天の同診療所前で

「働く者・貧しい者・弱い者・地域住民のための医療をもつ一度つくり上げよう」。医療法人南労会・松浦診療所（并天）を舞台に「経営側による組合差別・組合つぶし」を巡って二十二年間争われてきた争議が終結しました。

労働側である全国金属機械労働組合港合同・南労会支部によると、昨年九月から大阪地裁における和解交渉が重ねられ、同時並行で直接交渉も続けられてきた結果、三月十一日、同裁判所で和解協定が成立しました。

◆解決金を支払い、診療所を再建

和解協定では経営側に対して主に次の点を求めています。

- ・未払い賃金に対して解決金を支払つ
- ・長年の労働争議に関し遺憾の意を表明する
- ・労働法及び労働関係法規を守る
- ・労働条件などについて労働組合と対等な立場で協議する

・設立の趣旨を踏まえ、組合員の雇用を保障する形で松浦診療所の存続および再建のために努力する

- ・組合員の基本給差別を是正する

一方、労働側に対しては「解雇撤回を求めない」、労使双方に対しては「中労委命令の取り消しを求める全ての行政訴訟を取り下げる」などが求められています。

◆最後の抗議集会

和解が成立した三月十一日、争議が始まって以来続けられ、平日昼休み恒例の光景となっていた同診療所前での労働者抗議集会の最後の行動が行なわれると共に、診療所前に掲げ続けられた横断幕「松浦診療所は判決・命令に従い未払い賃金を払え！ 組合つぶし21年糾弾！」

などと大書が外されました。

◆労働者医療機関として開設

港合同・南労会支部によると、松浦診療所は一九七六年、南大阪を中心とした多くの労働組合や労災被災者がお金を出し合い、「労働者・住民のための医療機関」として開設。働く者や庶民の目線で診療に当たる姿勢が多くの患者の信頼を集め、待合室は常に患者で溢れました。また病気だけでなく、その原因である過酷な労働条件や労働環境、公害や社会的差別にまで目を向け、職場改善や予防活動、補償のための行政

交渉なども手掛け、「働く者と住民の命と健康の拠り所」としての役割を果たしてきました。

◆「儲け主義」に走り組合攻撃

しかし、経営責任を担った幹部らはやがて“儲け主義”に走るようになり、法人を“私物化”。批判する労働組合を嫌悪して攻撃を加え始めました。

一九九一年八月、経営陣は夜間診療を切り捨て、勤務時間を一方的に変更。これが争議の発端となり、以来、組合員だけ賃金を未払いにする、組合役員を解雇する—などの組合差別・組合つぶしを繰り返してきました。

◆「解雇撤回」なご掲げ22年

これに対して労働組合は「労働者医療を守れ」「解雇を撤回しろ」「賃金を当たり前前に払え」と主張し、上部団体「港合同」の指導による職場闘争を軸に、「ヒラまきや集会・デモを重ね、地域や全国の労働者の支援を受け、労働委員会や裁判所にも訴え、被解雇者の生活拠点の確保もしながら、二十二年間闘い続けてきました。

港区の日常的な光景となっていた同診療所前での毎朝の就労要求や毎日の抗議集会は、地域

↑一九九二年6月から続けられた毎昼休みの抗議行動①と、朝の就労要求②



労働者の支援を得て一九九一年六月から続けられてきたもの。また地域平和団体である「南大阪平和人権連帯会議」はこの闘争を「自分たちの闘い」と位置付け、「共闘会議」を結成して支援を続けました。

◆「受けた恩義は運動で返す」

今回の結果について港合同南労会支部は「大要次のようなコメントを発しています。

「二十二年間の長きに亘って和解を拒否し、組合つぶしの完成を狙っていた南労会を交渉のテーブルに就かせ、和解に至らしめたことで、闘争は大きな節目を迎えました。同時に、組合役員ら十一名にかけられた解雇を撤回させるこ

とできませんでしたが、そうした被解雇者の拠点として『NPOみなと合同ケアセンター』

(二〇〇一年末に開設)を確保できたこと、また松浦診療所の再建を約束させ、残った組合員により労働組合の旗が守られたことは、何物にも代えがたい成果だと考えています。こつした労働者有利の解決をもたらしたのは、上部団体である港合同の『一人の労働者も切り捨てず大切に』『姿勢とその大きな力量、そして地域から全国に至る多くの皆さんの『理解と』支援です」

「私たちはこの勝利を新たな出発点として、これまでに受けた『恩義』を何よりも運動で返していきたいと決意しています。そのため、①これまでの闘争の意義や教訓を明らかにする②松浦診療所を『働く者の医療』という原点に立ち返って再建する③過酷な条件下にある他の労働者の生活と権利を守るため共に闘う④闘争中に得た介護職場での経験を生かして介護や社会保障の相談に乗る—などの活動へ踏み出そうと思っています」

身近に楽しく温かく

賑わった「ふれあい福祉のひろば」



→「福祉を身近に」と催され、賑わった「みなとふれあい福祉のひろば」は11月2日、港区民センター（写真）は港青成園による和太鼓演奏

「楽しみながらみんなで福祉を身近に考えよう」と11月10日（土）、港区民センターで「みなとふれあい福祉のひろば」が開催されました。みなとふれあい福祉のひろば実行委員会の主催で七回目。十時から十五時まで、工夫を凝らした楽しく元気で温かみのある内容に、来場者の笑顔が溢れました。

◆舞台に拍手、展示に人だかり

舞台では港中学校吹奏楽部による吹奏楽演奏を皮切りに、障害者施設による歌や和太鼓演奏や創作ダンス、手話サークルによる手話劇、健康教室歌体操による歌体操、港区社会福祉協議会などによる認知症クイズ、その他、様々なグループによるエイサー・チャリティーディング・安来節などが次々と演じられ、最後は参加者全員による河内音頭で大きな盛り上がりを見せました。どの出し物にも大きな拍手が送られていました。またロビーや会議室などでは、高齢者・障害者による手づくり作品バザー、高齢者デイセンターなどによる作品展示、手話サークルによる手話体験、港図書館による絵本読み聞かせ・パネルシアター・本のバザール（無料提供）、その

「デイセンター利用者の作品に感心する高齢者」と「まちがいに挑戦する男の子」



他、様々なグループ・団体による遊び・工作・ゲーム・飲食・脳トレ・認知症チェック・美容などのコーナーに人だかりができていました。

◆点訳絵本など「知ってほしい」

このうち「遊びのコーナー」で点訳絵本などの紹介をしていた駒崎順子さん（はつぴいポケットみ・な・と代表）は「点訳絵本・さわる絵本・布の絵本は、視覚・肢体・知的などの障害を持つ子供さんや大人のために考案されました。大阪市中央図書館などに置かれています。全国的には珍しい存在で、大阪でもあまり知られていません。少しでも多くの方にと「コーナー」を設けてもらいましたが、色んな障害の方が来ら

れて良かったです」と話していました。

◆盲ろう男性が「手話」コース

また参加者のうち「手話体験コーナー」でヘルパー女性と一緒に童謡「うれしいなまつり」の手話コースの練習をしていた盲ろう者の河野隆一さん（五九）（牛野区）は「お世話になっっている『手と手とハウス』（NPO法人大阪盲ろう者友の会が運営する波除の施設）の職員さんから教えてもらって初めて参加しました。

色々な催しがあり、おいしい物が安く食べられ、楽しい催しですね。手と手とハウスには毎週月曜から金曜まで通い、木曜の午後は上六で点字の勉強をしています。八十代、九十代の両親と三人暮らしで、家の中での食事などは何とかできますが、外出はヘルパーさんに付いてもらわないと無理です」と話していました。

◆知的障害の娘を「入所させたい」

また重度の知的障害を持つ西内美紀さん（二〇）と一緒に会場を回っていた母親のさゆりさん（五〇）（八幡屋）は「舞台の踊りや演奏が楽しく、美容コーナーでは無料で前髪をカットしてもらいました。色々な障害者が交流できるの

←盲ろう者の交流が盛んだった「手と手とハウス」コーナーで、「布絵本」を触る子供たち



とても良い催しだと思います。娘は市内（区外）のケアホームに通っていましたが、信頼関係が壊れたので二月に退所しました。家にはかりいるのは良くないので、早くどこかへ入れたいとぽると（波除）に相談するなどして区内の作業所の空きを探していますが、今は特別支援学校を卒業した人たちの入所で定員一杯になり、難しいようです。この子は重度の知的障害ですが、細かい作業は得意で、五〇〇～一〇〇〇ピースのパズルを三時間ほどで完成させることもできます。国は『障害者が地域で暮らせるように』と唱えながら、受け皿となる施設（ケアホームやグループホームなど）をこれ以上造らない方

向をとっており、矛盾を感じます。二人暮らしで、私も若くないので、この子を早く安定した生活に移してやりたいと願っています」と話していました。

◆小規模作業所が連携

なお、実行委員会メンバーでもある港区障害者施設連絡会（愛称「ポトネット」）は、区内にある心身に障害を持つ人たちの働く場・社会参加の場である小規模作業所の集まり。平成十五年三月の「第一回みなと福祉のひろば」(二)みなとふれあい福祉のひろば」の前身をきっかけに生まれました。現在、あゆみ作業所、グリーンズ マーガレット工房、ふらっと、港ひかり作業所、ワークみなと、ゆうゆう美波途、手と手とハウス、ナポリレオンフィッシーの九作業所が加入。「障害を持つ人たちが、住み慣れた地域で安心して暮らしていけるように」と連携し、また独自商品の製作・販売や下請け作業の受注など、様々な工夫を重ねながら活動を続けています。問い合わせはワークみなと（☎六五七一・七五二一、FAX六五五六・九〇二〇）まで。

障害者ミニ情報

■NPO法人ナポレオンフィッシュ「下請け作

業」 内職・軽作業＝応相談▽NPO法人ナポレオンフィッシュは就労継続支援B型の指定障害福祉サービス事業所（磯路二・一九・四・五B、TEL・FAX六五八・九三三四）。

■港ひかり作業所「手づくり品・レザークラフ

ト」 小銭入れ＝五百〇六〇円▽キーケース＝五百〇千円▽カードケース＝四百円▽レザーハズ＝三百五十円▽ペンケース＝七百円▽キーホルダー＝二百五十円▽めがねケース＝千円▽小物入れ＝千〇千三百円▽（従港ひかり作業所は池島一・四市宮住宅内（TEL六五七四・二四二五、FAX六五七・二五九〇）。

■生活介護 あゆみ作業所「手づくり品・トル

ベント」 ウェルカムプレート・袋物・和柄帽子など＝三百円より▽あゆみ作業所は指定障害福祉サービス事業所（築港二・一〇・一八、TEL・FAX六五七・一〇七二四）。

■ワークみなと「手づくりお菓子・印刷」

りんぐケーキ・パイナップルケーキ（バザー時のみ）＝百円▽（ぬめべし）＝百円▽封筒印

刷（長3、千枚以上）＝一枚十円（応相談）▽は

がき（十枚から）＝一枚二十円（応相談）▽名刺（ロ）入れ可＝百枚一〇五〇円より▽カラー名刺（ロ）入れ可＝百枚一五七五円より▽ワークみなどは就労継続支援B型の指定障害福祉サービス事業所（夕凧一・六・三、TEL六五七・七五二一、FAX六五五・九〇二〇）。

■グリーンズ・グリーンズ「ベジタブルレス

トラン・手づくりお菓子・弁当など」 ビュッフェスタイルの昼定食＝八百円▽パウンドケーキ＝二百円▽豆乳プリン・寒天ゼリー＝二百円▽日替わり弁当（月々水曜日に港区内配達）＝五百円▽オードブル＝応相談▽グリーンズは就労継続支援B型の指定障害福祉サービス事業所（築港二・一〇・七、TEL・FAX六五七四・一九二〇）▽グリーンズは就労移行支援の指定障害福祉サービス事業所（築港二・一〇・一一、TEL・FAX六五七・一八三八）。

■マーガレット工房「コンピュータ作業・ティ

ヤツ製作・手づくり品」 ホームページ作成など＝応相談▽少量同きプリントTシャツ＝千円より▽ビーズ製品＝四百円より▽マーガレット

工房は地域活動支援センター（田中二・一一・一六、TEL・FAX六五七・二二八四）。

■ふらっと「手づくりお菓子」

クッキー＝二百円より▽雑巾＝一枚百五十円▽ふらっとは地域活動支援センター（夕凧一・二・一八、TEL・FAX六五七・二二五五）。

■ゆづり美波途「手づくり品・レザークラフ

ト」 マグネット（花型・帽子型）＝百円▽アクリルタワシ＝百円▽お手玉＝百円▽ブックカバー（レザークラフト）＝千円より▽革製品色々＝二百円より▽ゆづり美波途は生活介護就労継続支援B型の指定障害福祉サービス事業所（三先二・二・五、TEL六五七・一一一九、FAX六五七・二二四二）。

■手と手とハウス「手づくりお菓子の手作り品

品・紙ひも作品（小物入れ・牛乳パック椅子など）＝四百円より▽点字用紙リサイクル品（ティッシュカバー・靴型小物入れ等）＝二百円より▽アクリルタワシなど小物＝五十円より▽手と手とハウスはNPO法人大阪青うろ者友の会が運営（波除五・四・一八・一階、TEL六五八五・二〇三二、FAX六五八・三〇三五）。

別れがつらい！

池島 1・勝部泰臣 79歳
かつへやすおみ

「花」風フタトモアルサ サヨナラダケガ人生ター。『黒い雨』の作家・井伏鱒二の作詩かと思っていたが、漢詩の翻訳だぞうだ。余程つらい別れがあつたのだらう。後世まで残る名訳とされる。

今風がなくとも桜花は散り急いでいる最中、人の世の無常を嘆くかの如く。人は出逢いがあつて愛や友情が生まれ、やがて否応なしに「別離」を迎える。この世の儼たる運命とはいへ、余りにも悲しく淋し過ぎる現実を受け止めきれぬ弱き人間と、吾を知る。

神戸、東北と続いた震災で命を絶たれた多くの人々、そしてその遺族、悲しみは如何ばかりだつたらう。吾らの想像をはるかに超えていよう。見守の活動で毎朝挨拶を交わした先生方の何人かとも「別れ」があつた。お互いに元気で言い合い、あとはサヨナラである。別れはつらい。だからこそ二日二日を、大切に大切に生き抜きたい。

広がれ 天保山第五コーポの取り組み

夕田・70代男性

「あの田を忘れるな」マンション内での助け合いを」と取り組まれた天保山第五コーポの防災訓練の記事（前号1頁）が刺激になりました。私たちの地域でも大震災後、訓練は何度か重ねていますが、まだ町会連合単位です。一つのマンションでこれだけ質の高い防災準備をされていることに驚きました。特に、簡易トイレを設置し、独自マニュアルやマップを作成し、震災発生直後の対策本部立ち上げも既にイメージされていることは、大変素晴らしいと思いました。この記事を通じて、こうした先進的な取り組みが他の地域やマンションに広がることを期待します。

防災フォーラム、陸前高田の経験に胸熱く

田中・70代女性

いつも詳しい地域の情報に感心しながら読ませてもらっています。二日二日では「災害時の医療を考える」と題した「港区防災フォーラム」

の記事（前号4頁）に感銘を受けました。中で

も陸前高田市の病院の院長さんの生々しい震災・津波体験談には胸が熱くなりました。私はフォーラムには参加できませんでしたが、とても詳しく分かりやすく書いて頂いているので、実際に聴いているように読むことができました。津波の怖さが手に取るように伝わってきます。そして、そのあとの医療再開の「苦労」には涙が出ました。本当に、この経験や犠牲を無駄にはならないと心から思いました。素晴らしい記事がありがとうございました。

闘病の森上さん 慰問これからも！

築港・90代女性

「平和のため戦争体験語の継」じつを毎日ぐぐぐぐと読ませて頂いています。森上行茂さんの空襲体験や戦後の「夫婦での「苦労」（前号まで三回連載）には心より「お疲れさまでした」と申し上げます。私は戦前に四国から大阪へ出ましたが、空襲になる前に田舎へ逃れたので、空襲の恐ろしさは体験していませんが、戦中戦後の食料不足の辛さは身にしみて覚えています。

すのど「戦争は止むべきでないものはない。一度と国民をあのような悲惨な目に遭^あわせてはいけ
ない」という言葉は「本当にそうだー」と思
います。「二十年先、三十年先のことより今を大切
にしてほしい、特にあの戦争を落^おり抜け、戦後
の混乱を乗り越え、懸命に働いて今日の日本を
築いた高齢者をこそ大切に扱ってほしい」とい
う言葉は政治家に聴いてほしいです。大腸がん
との闘病中だったので、ぜひ乗り越えて慰問を
続けて頂きたく、心よりお祈り申し上げます。

「高齢者自殺」に寄り添う

池島・60代女性

「高齢者の自殺を考へる」と題した姉川紀代
美さんの提言(前頁9頁)にききさせられまし
た。自殺の年少化傾向の中で、私自身もあり
気にはかけていみせましたが、こうして実際
に高齢者自殺に関わっていられた方のリアルな
報告を読むと、もっとお年寄りの気持ちに注意
を払ってあげないといけないなあ、特に孤独感
を抱かれないよう、ちょっとしたことでも声を
かけるといい、周囲と繋^{つな}がってほしいことを感

じさせてあげなければいけないなあと思います。
私自身もこれから年をとり、夫に先立たれたり
すれば、こじった気持ちになることは充分考え
られます。ここに書かれていた二つの事例は他
人事ではありません。普段あまり考えない問題
に目を向けさせて下さった姉川さんに心から感
謝します。



↑読者の作品から辻悦子さん

市国元町3の絵手紙

亀の甲より年の劫

市国元町3・辻悦子64歳

「障害あっても働くぞー」(前頁12頁)を読
んで思ったこと。私は今のところ障害はありま
せん。しかし還暦も過ぎて現在六十四歳。四月
に職場との契約を更新して頂きましたが、元氣
なうちはやっぱり社会の一員として微^ちかなが
らも人の役に立ち続けたいと考えています。「亀
の甲より年の劫^う」と若い人に言うことがあり
ますが、歳を重ねたら、それなりの経験上の智
恵は湧いてくるもの。これからますます輝きを
増していくであろう年の「甲」を生かして、世
のため人のため、また自分のためにも頑張りたい
と思った次第です。

障害あっても頑張る姿に落^おち込む

市国元町3・60代男性

「障害あっても働くぞー」(前頁12頁)を読
んで。私は精神障害(うつうつ)があります。
大学を出て五年ほど会社で働きましたが、人間
関係がこじれて退職し、それからはバイトをし

て食くい繋つなぎましたが、二十代から働きに出られなくなり、医者の診断を受けて障害認定されました。二級の時生活保護で暮らしていました。二級の認定を受けてからは年金で生活しています。障害があっても頑張っている人の記事を読みて、後めたい気持ちも起こまり、落ち込んでしまいました。頑張れる人もいます。頑張れない人もいます。そんな人たちのことも取り上げてほしいと思いました。

弱者に視点 岸本さん女つかに

（港晴・70代女性）

「ヤッさんの今昔紙芝居」(前号まで連載)の最後の文章(1月12日)に肺癌がんのため市内の病院で亡なくなられたとの訃報ふほうを読んてびっくりました。まだお元気だとはかり思っていたのに、そして温かく懐かしい港区の話を語って頂き、毎週楽しみにしていましたのに…残念でなりません。(この最終回)高度成長の中ひっそり遊んだ姉弟(は、これまでとは違って、ちょっと寂しげな筋書きでしたが、それもまた岸本さんらしい、弱者への温かな視点のものだったも

のだと思いました。病氣と闘いながらの連載、本当にお疲れさまでした。また毎月、私たちを港区の過去へタイムトリップさせて下さって、本当にありがとうございます。今は安らかに眠りください。

室田大祐さんは港区の誇り

（市国元町・50代男性）

「なにわの名工」に選ばれた室田大祐さんの記事(前号35頁)を読んて。こんな素晴らしい日本料理の技術と指導力を持った方が港区におられたことに驚き、また誇りに思いました。

「田辺大根を使った風呂吹き大根」の考案や、指導は、相応に高く安定した実力がなければできるところはないと思います。しかも略歴を読むと、二代目はいえ、店を本格創業へと発展させたのは自身の代になってからとか。その情熱と頑張りには脱帽です。私は町工場の二代目で、分野は違いますが、こつという技術系の話には興味があります。次回が楽しみです。

沼島出身の浜口さんがんばれ！

（区内・60代男性）

「故郷の話をしよう」(前号まで連載)の浜口雄介さんの沼島ぬしの思い出話は三回とも楽しく懐かしく読ませて頂きました。最終回では中学卒業と同時に島を出てからのことが語られていましたが、私も中卒で徳島から大阪へ出たので、古里ふるさとを離れる時の不安や希望、仕事の辛さや都会暮らしの楽しさなどは浜口さんと同じように感じたいものです。私は勤め人のままで、自営業にはなりませんでしたが、今、不況の中で自転車店を営まれている浜口さんの「苦労は実感できませんが、ぜひ故郷を思い出しながら頑張っている」と思っています。私も辛い時、苦しい時、はいつも、古里のことを思い出して乗り越えてきました。私にはもう実家は残っていませんが、浜口さんは三番目のお兄さんが守っておられるところなので、私よりさらに安心感とゆとりがあるものがあるのではないのでしょうか。それから、このシリーズはぜひ続けてほしいと思います。何なら私が語ってもいいですよ。

花と緑のまちづくりへ

グリーンコーディネーターを認証



→「花と緑のまちづくりの中核に」との期待を込めて行なわれた「グリーンコーディネーター認証式」は3月25日、大阪市公館で

「花と緑のまちづくりの中心的な役割を担って下さい」と三月二十五日、「グリーンコーディネーター十一期生認証式」が大阪市公館（都島区）で行なわれました。大阪市が主催。

認証式では講習会への出席や課題などの要件を満たした二十四区の三十一人が大阪市長から認証を受け、港区民も一人、認証されました。

☆緑化リーダーの中から育成

大阪市ゆとりとみどり振興局（現建設局）によると、「グリーンコーディネーター」は花と緑のまちづくりを進める上で重要な役割を担っており、講習会の講師や緑化技術指導など、地域住民や緑化ボランティアの中核的存在。そのため、現在活躍している「緑化リーダー」等の中から「より高い技能を持つ人材」として育成されます。

六～八カ月^{わた}に亘る講座では、①より専門的な緑化技術②地域の意見をとりまとめるためのワークショップ技能③講師として活躍するためのプレゼンテーション技能などを身につけてもらうため、講習や実習を実施。平成二十年度から三百二十五名を目標に育成が開始され、今回までに約三百名が認証されました。

「べんてん花」つくり広場」で活動する人たち

（上はポンスネットデイジーなどの花植え、下はマリーゴールドの種まき）は4月3日朝



☆「花友リーダー」と力合わせ

港区ではグリーンコーディネーターがこれぞ土八人となり、「種から育てる花」つくりの中心母体である「港区花みどり友の会（平成十七年発足、百十名を運営しています。また、この他に港南中・築港小・港晴小・波除小にある「ミニ花広場」にも参加し、一般の花」つくりボランティアや緑化リーダー、区独自の「花友リーダー」と力を合わせ、育てた花々を「ふれあい花壇」や学校・幼稚園などに飾り、潤いのある花と緑の豊かな港区「つくり」を進めています。四月三日にはさつした活動の一環として、友の会の拠点「べんてん花広場」（弁天3）で種まきが行なわれました。

花で消防署に潤い

市がマンション住民に感謝状



「港消防署の庭に花を植えて地域に潤いを与えた」。超高層マンション「クロスタワー」（井天1）の住民グループ「港区花みどり友の会12班クロスカーテン同好会」（右間ゆりか代表）が三月七日、大阪市消防局から感謝状を贈られました。昨年十一月に港消防署が大阪市長から「地域貢献活動賞」を授与されましたが、その活動に関わったことに対する表彰。

☆質の高い緑化活動の中で

同会は同マンションの住人が「楽しみながら居住空間を少しでも快適に」と二〇〇九年に結成。育苗に卵ケースを再利用するなど「エコ」にも配慮しながら一階の玄関花壇をデザインし、周辺に「ミミを捨てる人が少なくなるなど地域の環境美化にも貢献。一年には大阪市長主催の緑花コンクールで市長賞を受賞するなど、質の高い緑化活動が続けてきました。

今回の表彰は、そうした活動の一環として、マンションに近い港消防署の署員と力を合わせて三年ほど前から同署玄関に花壇を造成し、シユリアン、ノースポールなど十五種類の花を植え、継続的に世話をするにつれて「署員や通行人

に潤いを与えた」ことが評価されたものです。

☆楽しみながら「エコ」も心がけ

表彰式には大阪市消防局の千福好伸局長、岡田俊樹総務部長、高木亨理事、港消防署の細尾稔署長らが出席、千福局長から同会の岩間代表と小谷悦子会員に賞状と記念品が贈られました。岩間代表と小谷会員は「私たちのマンションは超高層のため、一階の花壇は突風も吹く厳しい環境にあります。その中で、それに耐える三十数種を植えていますが、消防署にもその中から十数種を選んで植えています。活動の中では、何より私たち自身が楽しむこと、同時に地域や子供たちには「エコ」や地球環境を考えてもらうことを意識しています。今回の受賞を機に、これからもそうしたふれあいを大切にした緑化活動が続けていきたいと思っています」。

また港消防署の細尾署長は「右間さんたちは私たちと協力し、署庭の花壇を花一杯にし、署員や通行の方に潤いを与えたいとの思いから取り組まれました。市民の皆様からも『いつもお花で綺麗ですね』とお声をかけて頂き、署員一同、大変喜んでおります」と話していました。

→「花で港消防署と地域に潤いを与えた」と市から表彰を受けた「港区花みどり友の会12班クロスカーテン同好会」右間代表と小谷会員(左)の二名、細尾署長と共に花壇前で

自然とふれ合い 歓声

八幡屋公園で「スポみどりフェス」



「春の一日を自然に親しみスポーツを楽しむ」とういふ三月二十日(祝)、八幡屋公園で「スポーツみどりフェスティバル」が開かれました。スポーツパーク八幡屋活性化グループ(財)大阪市スポーツ・みどり振興協会などで構成が主催。区内外から親子連れなど多数が訪れ、動物との触れ合いやスポーツ体験に歓声を上げていました。

●体育館やプールでも

催しは朝十時にスタート。大阪市中央体育館では「緊急車両展示」「ふわふわ海賊船」「アニマルバツァリーカー」「スポーツ体験」「スーパーボールすくい」など、芝生広場では「ポニー乗馬体験」「ふれあい動物村」「エアートランポリン」「自然工作教室」など、大阪プールでは「アイススケート場の開放」「清水宏保氏来館イベント」「チアダンス体験」など、また同時開催の「春の一日みんなでみどりに親しもう!」(財)大阪市スポーツ・みどり振興協会みどり推進部が主催。では芝生広場で「寄せ植え体験」「ネイチャーゲーム」などが行なわれました。

●人気の「ふれあい動物村」

これらのうち特に子供たちに人気を博したの

「人気のあった「ふれあい動物村」。④はおとなしいアルパカの白い毛をさわる女の子、⑤は丸くて硬いアルマジロを恐る恐る抱く女の子



が芝生広場の動物関連コーナーでした。このうち「ふれあい動物村」ではヤギ、ヒツジ、ウサギ、アヒルなど普段目にしない動物たちを直接触ったり抱いたりできるとあって待ちの行列が途切れず、アルマジロ(骨質の小角板でできた皮膚を完全な球状に固めて外敵から身を守る特性を持つ体長二〇〜二〇〇センチの夜行性小哺乳動物)の硬くて丸い体を恐る恐る抱く女の子、アルパカ(主に毛を利用するため南米アンデス地方で飼育される体長一メートル、肩高一メートルほどのラクダ科の家畜)の白いふわふわした毛に触って「いい匂いする男の子」が見られました。

「ポニー乗馬体験」(共通利用券十二百円)ではポニー(小さい馬)に乗せてもらって田形コースを一周する幼児を写真に撮る若い親が目立ち、八幡屋から祖母に連れられて来たという四歳の男の子は「ポニーの背中は、高かった。でも怖くなかった。面白かった」と得意げでした。

●「素敵なイベント」と参加者

午後一時過ぎには雨が降り出し、屋外イベントではスタッフが雨合羽を着て動物たちをトラックへ避難させるなど順次片づけにかりましたが、屋内イベントは引き続き午後四時半まで賑わいを見せていました。

雨が降り出した頃、「ふれあい動物村」でアルパカを触っていた池田雄大くん(四)(磯路)は「いつもふわふわしてきもちよかったです」。母親の悦子さんは『ムーチャ』でこのイベントを知り、「一回目の参加です。しおり作りなどしましたが、まだまだ遊ばせてやりたいと思っています。このイベントは身近な所で自然や動物に触れられる、とても素敵な催し。ずっと続けてほしいです」と話していました。

こども

雪遊び メチャ楽し！

リンク削った氷の山に親子歓声



→子供たちの歓声が溢れた「氷あそびしチャオー」≡3月12日、大阪フール北側広場で

「スケートリンクを削った氷で雪遊びしよう」。三月十一日朝、大阪フール北側の広場で催された早春恒例の無料イベント「氷あそびしチャオー」は大勢の親子で溢れました。大阪市港区社会福祉協議会と港区みんなと子育てしチャオ会の主催、八幡屋スポーツパークセンタ―・大阪フールと大阪市ゆとりみどり振興局の協力で四回目。

青空の下で約一時間、手袋・タオル・スコップ・バケツなどの「遊びグッズ」を携えた何組もの親子が次々と訪れ、うず高く積み上げられた氷の上で、大阪ではなかなかできない「雪だるま」や「雪合戦」を楽しみました。

手袋付き防寒服に身を固め、バケツに氷を詰めたり出したりを繰り返していたのは井上心那ちゃん(四)(三先)。母親の和代さんは「この春から幼稚園ですが、その前に素敵な思い出ができました」。その横で父親の俊規さんはよその子に頭から氷をかけられ苦笑いしていました。大阪フールの担当者は「整氷の際に削って出る氷を有効活用していますが、こんなに喜んでもらって嬉しいです」と話していました。

滑走の爽快を広げよう

スケートサークルが発表会



→アイススケートの楽しさを感じさせてくれた
「NiCスケートフェスタ」の写真は最後を飾
ったフォーダンスⅡ3月4日、大阪府

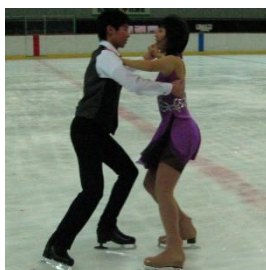
「滑走の爽快さを多くの人に」とアイススケート愛好者によるイベント「NiCスケートフェスタ」が三月四日夜、大阪府（田中3）で催されました。港区民も参加するNiC（なんばアイススケートサークル）の主催で「二回目」。

★滑走やダンスの指導も

フェスタは三部で構成。第一部の「基本滑走&フリー滑走」には一般参加者も加わり、同サークルの原田事務局長が「滑走理論」を、井上会員が「アイスダンス・ステップ演技」を、それぞれ指導しました。この中で原田事務局長はスケートティングの基本を「体の構造とニュートン力学」から説明し、①フエンスに手を置いて上半身を反り返らせる②曲げた脚を伸ばして自力滑走をする③スパイラルをするの流れて演技指導を行いました。このあと新家止信会長（七二）（市岡在住、区内で経営）コンサルタント業）が開会挨拶に立ち、「日頃の練習の成果を発表し、一般の方にもスケートの楽しさを感じてもらおうと、昨年に続いて催した。最後まで楽しみましょ」と呼びかけました。

★ペアとシングルが次々演技

「アイスダンスで喝采を浴びた橋童・実合直希ペアの「ウィロー・ワルツ」④と、長瀬まさ子・新家止信ペアの「キャナスタ・タンゴ」&スイングダンス⑤



第一部ではアイスダンスのペア九組とシングル演技の八人が、ワルツ、タンゴ、スイング、映画音楽など様々な音楽に乗って次々と練習の成果を披露しました。中でも昨年に続いて羽織袴と扇子の和装で登場し、若柳流日本舞踊「はぐれ」を舞った新家会長の演技には、その意外性と大胆さに観客から大きなどよめきと拍手が起りました。

スケートティングの技量は様々ながら、どの演技者も、滑走の爽快感と注目される歓びに溢れた、爽やかな笑顔が印象的でした。

第二部は再び一般参加者も加わってのフォー

クダンス。参加者は輪になり、藤本顧問の指導でステップや振り付けを練習。「線路は続くよどこまでも」の軽快なメロディが流れる和やかな雰囲気の中、お開きとなりました。

★歳を取っても上達できる

出場者のうち、「リベル・タンゴ」の曲に乗って見事なシングル演技を披露した中村光則さん（八三）（堺市在住）は「スケート歴は五年ほど。九州や東京のシニア大会に出場したこともあり

ますが、このフェスタには新家会長から誘われて初めて出場し、緊張しました。今は仕事を離れているので、週五回、各二時間練習しています。アイススケートの魅力は何といっても



→シングルで沸かせた新家正信さんの若柳流白

本舞踊「はぐね」キリ「⑤」福岡奈央子さんの「ミッドナイトブルー 夜への旅立ち」⑥

滑走の爽やかさ。それに、歳を取ってもレベルアップが可能で、それを実感できるのが嬉しいです」と話していました。

★氷の上を流れるように

また、アイスダンスで新家会長とペアを組み、「キャナスタ・タンゴ&スイングダンス」の曲に乗って流れるような演技を見せた長瀬まさ子さん（八二）（枚方市在住）は「新家さんは緊張

折などによるフランクを挟みながら四十数年。今は週二回練習しています。アイススケートの魅力は、例えばターンやスピンでも、練習すれば必ず少しずつでも上達でき、小さな達成感をたえず得られるところです。難しいのは、綺麗に、氷に張り付くように、氷の上を流れるように滑ることですが、そんなレベルへ少しずつでも近づいていけることが、また楽しみになっています」と話していました。

★初心者からベテランまで

Nicoは『アイススケートの楽しさを多くの人に』との目的で二〇一〇年五月に発足。大阪

府下在住の二十代〜八十代の男女約七十名が在籍。会員のスケート歴は初心者から六十数年のベテランまで様々。毎週、中央区難波のスケートリンクで練習を重ねています。問い合わせは ☎〇九〇・三八二二・四三三五新家会長まで。

スポーツ短信

港区小学生バレーボール教室「大阪みなと」

五月は十一日（土）、十八日（土）、二十五日（土）に池島小で九時から練習。見学・体験歓迎。四年生以上。 ☎〇七〇・五八五九・四八三二 萬井

■弁天出身の天ノ若（あまのわが） 大相撲春場所（三月十

二十四日）で三勝四敗。序 段・東五九枚目、玉ノ井部屋。本名天野清智（あまのきよち）三十三歳。平成七年夏場所入門。過去最高位は序 段西一四枚目。



発表の緊張と歓び

春のセンターまつり賑わう



弁天町市民学習センター（弁天一）の生涯学習グループが日頃の活動成果を市民に発表する恒例イベント「春のセンターまつり」が今年も三月七日から十七日まで開催され、多くの市民で賑わいました。主催は同センターと春のセンターまつり実行委員会。

●フラダンス コーラスなど次々

会期中、四日目の「ときめきステージ」には朗読、太極拳、フラダンス、女性コーラス、太正琴、二胡、尺八、オカリナ、民謡、ダンス、ゴスベル、三線、童謡など二十グループが登壇。発表の緊張と歓びに溢れた舞台に盛んな拍手が送られていました。また会期を通じて行なわれた「作品展示」では、来場者が書道、絵手紙、生け花、川柳、写真、油絵、日本画などの作品に感心したり創作法を質問したりする光景が、同じく会期を通じて開かれた「二日体験教室」では、希望者が興味ある分野の手解きを受ける姿が見られました。

●入りやすいが奥深い「太極拳」

このうち「ときめきステージ」で、優雅な調べに乗せてゆったりとした太極拳を披露し、会

←「のびやかに朗読レッスン」による朗読の

「弁天町健康太極拳同好会」による演舞の



場のため息を誘っていたのは「弁天町健康太極拳同好会」。メンバーのうち近藤千恵美さん（弁天在住）ら女性四人（六十〜七十歳代、経験四〜八年）は出演後、「このセンターの『はじめま専科』で体験して始めました」「太極拳は動きがゆったりしているので、女性や高齢者でも無理なく始められますが、やってみるととても奥が深く、いびし銀の魅力があります」「動きはゆるやかですが、実際にはけっこうきつい運動をしていることになり、足腰が鍛えられているのを感じます」「大事なのは呼吸法で、特に息を吐き切るのがポイントです」「それぞれの動きには意

味やイメージがあり、それらを理解するにつれて動きも良くなっています」最初は流れを覚えるだけでも大変に思いますが、先生が楽しくリードして下さるので、楽しみながら自然に覚えていきます」これからも和気あいあいと楽しく続けていきたいです」などと話していました。

●楽しく若々しく女性「コーラス」

同じく「ときめきステージ」に出演し、東日本大震災復興ソング「花は咲く」と、若手県出身の歌人・石川啄木いしかわたくもくの短歌を題材にした「ふるさとの山に向かいて」を熱唱、会場を熱い感動で包んだのは女性コーラスグループ「コールフ



→「コールフラフ」による「花は咲く」合唱の
と、絵手紙の展示を鑑賞する人々

ラフ」。指揮者・菊池敏子きくちみこさんは「大震災から明日で二年といつこで、みんながこの二曲を選びましたが、歌っているうちに胸が一杯になりました」私たちは港高校出身者を母体に三十年ほど前に発足したグループですが、一般の方も大歓迎。『明るく楽しく若々しく』をモットーに、

こころ月一回練習し、年に何回かイベントや介護施設で発表させて頂き、結果としてボケの予防（笑）と心身の健康を実現しています。またメンバーのつち合唱の合間に石川啄木を紹介する朗読を担当した阿部恵美子あべけいみこさん（八四）（市岡在住）らは「先生の明るい指導に乗せられて、

この歳まで楽しく長く歌い続けることができています」朗読は先生の演出で入れましたが、歌の心をより深く伝えることができ、良かったと思っています」と話していました。

●語り合つ喜び「海外鉄道研究会」

一方、「作品展示」コーナーに、アジアやヨーロッパなどで撮った美しく迫力ある鉄道写真を展示していたのは「海外鉄道研究会」。案内役の重田裕章しげたひろあきさん（四十代、住吉区在住、旅の写真家・ライター・ドイツ語翻訳家・ガイドヘルパ

←「海外鉄道研究会」による鉄道写真展示のと
「顔のアトリエ」による似顔絵展示



しは「会員にはそれぞれ、蒸気機関車、国内の路面電車、海外の高速鉄道など得意分野があり、それらを交流することで楽しみが一層広がります」近頃はインターネットで色々なことを知るようになりましたが、やはり生の体験を直接語り合つことに勝る喜びはありません」東京、大阪、名古屋に支部があり、会員は合わせて二百五十人ほど。大半が五十代以上で、女性は七く八人。大阪ではこのセンターで偶数月に例会を開き、次は四月二十一日（日）十三時からです」と話していました。

騙し騙される愚かさ

石炭倉落語ベースの時代劇に反響



→遊郭を舞台に、互いに騙し騙される人間の愚かさ可笑しさを描き、反響を呼んだ『椿屋騒動 情の名残り月』のカーテンコール

「互いに騙し騙される関係が今の社会とダ

ブリ、考えさせられました」。傑作落語『文違なごい』をベースにした時代劇『椿屋騒動 情の名残り月』が三月下旬に波除の自由空間「石炭倉庫」で上演され、反響を呼びました。石炭倉庫を拠点に庶民の優しさや逞たくましさ、社会的メ

ッセージを込めた芝居を演じ続けるあんがが、いま一座が、あんががいま座長の脚本・演出で熱演。出演はあんががいまる、真田克幸、コ

ッシー原本、久木弥九蔵、バツハ典秀ほか。河野明夫（三味線、亀井澄夫（ギター）の両氏がバツク音楽で特別出演しました。

◆だました遊女がだまされて

——新宿の遊女・お杉には馴染み客がいた。

その一人で遊び人の半七には「無心を続ける親への手切れ金」として二十両を、田舎者の角蔵には「母の病気の治療代」として三十両を、それぞれ巧みな脅し透かしで用意させた。その五十両を手にお杉が向かったのは間夫の芳次郎。

「目の治療代」として金子を受け取った芳次郎は「せめて一晚一緒に」と絶えお杉を言葉巧みに振り切って出ていく。部屋には不用意にも小

←愛する男のために馴染み客をだましたお杉は、自分もだまされ哀しい末路を辿る④



筆という女郎からの手紙が。それには「兄の強欲から逃れるために」と小筆がせがんだ五十両を、芳次郎がお杉を騙して手に入れる手口が書かれていた。泣き伏すお杉。一方の半七もお杉の部屋で芳次郎からの手紙を見つけ、自分がお杉に騙されていたことを知る。戻ってきたお杉に噛み付く半七。開き直るお杉。「ぶつとくれ、どんどんぶつとくれ、どつせ金で売った体なんだ」。騒動を耳にした角蔵は「あの金子はお杉のために俺が出したものだ」と止めに入る。ところが、「それじゃ俺が間夫と分かっちゃったべ」と思い留まる。自惚れで目が曇った角蔵は、自分が一番の被害者であるとも知らず、「色男はつ

れえもんだ」と二人はくそ笑んでいた。

◆現代社会の笑えない構図も

江戸期の遊郭を舞台に、互いに騙し騙される関係が面白可笑しく演じられ、その笑いの中から、いつの時代にも見られる人間の愚かさと共に、「日本のため」と原発や基地やTPPを押し付けるアメリカ、「そつですわね」と応じる政府「そつやるな」と騙される国民「してやったり」とほくそ笑みながらも自壊していくアメリカといった現代社会の笑えない構図も浮上。どの芝居からも世の在り方を考えてもらおうという一座の姿勢が伝わってきました。

演劇ガイド

●あながいおまる一座『舞台女優』

座付き作

あやはゆき

家・故綾羽一紀追悼スタジオ公演。一遙かな遙かな遠い国へ旅する時は船の旅がいい。舞台女優八十周年記念公演の夜、ホテルの一室にあった古い手紙。まるで夢のような過去が甦り、女優・村松秋子はしだいに若くなる。原作・脚本：綾羽一紀、主演：辻美知子、演奏：大川真一郎（フリンネット）・吉田雅代（ピアノ）、演出：

あながいおまる。五月十八日（日）十一時半、十四時、十八時半の三回。料金は前売三千円、当日三千三百円。問い合わせ・申し込みは会場の石炭倉庫（波除六・五・一八、JR弁天町駅から国道四三号を北へ直進、安治川堤防突き当たり右すべ。☎六五八一・〇六八四）へ。

ライブ情報

●八幡屋出身ロックドラマー 桐田勝治さん

きりたかつじ

日

本のハードロックバンドのトップを走り続ける人気バンドに所属。「周りを元気づける灯台のようなミュージシャンに」と演奏に磨き。港中学校出身▽所属バンド「ガーゴイル」のアルバム『虹融合』好評▽四月十三日（土）に新アルバム『奇獣』発売▽四月十九日（祝）に『奇獣』

きじゅう

『虹融合』好評▽四月十三日（土）に新アルバム『奇獣』発売▽四月十九日（祝）に『奇獣』



↑桐田勝治さんのビデオ映像

発売記念ライブツアー出演予定（詳細未定）。

●三先のフォーク歌手・ペドロさん

毎月第一・三木曜 二十時サ・セラー（中央区西心斎橋）▽毎月第二火曜 二十時かつおの遊び場（中央区宗石衛門町）▽毎月第三火曜 二十時半ロージー（中央区西心斎橋）。

●市国元町在住の音楽ユニット「花々キャラ」

四月十八日（金）十八時半頃から「あわや食堂（築港一・八一七、☎六五七一・一〇七三）で開催の「生音ライブ」に出演予定▽五月十二日（日）「新開地音楽祭」に出演予定。メトロ神戸（地下鉄新開地）特設ステージで十五時半から演奏▽<http://www.oconnor.jp/shana2383>



↑花々キャラのメンバーのライブ映像

貫いた一匹狼画家

岸本安司さんを偲んで

本紙人気コラム「ヤッさんの今昔紙芝居」(昨年十月号から前号まで連載)の執筆者・岸本安司さん(南市岡)が二月二十三日に肺癌のため亡くなりました。生涯一匹狼の画家として独自の画風を貫くと共に、絵を通じて社会や地域への警鐘を鳴らし、また弱いもの、日陰にあるものへの愛情を示し続けた生き様に敬意を表し、「ここに追悼の意を込めて、本紙記者が折々に聴き取った回顧談を掲載するものです。」

◆港区に生まれ、小豆島で育つ

昭和六(一九三二)年三月、港区高尾町(現市岡)に生まれる。四人兄弟姉妹の末っ子だった。父は香川県大川郡志度町(現さぬき市)出身で、小学校教師を志して香川師範学校へ進んだが、学費を免除された代わりに小豆島へ赴任させられたという。二三年間の滞在中に

教えずで、下宿先の近くに住んでいた母と知り合い、後日結婚することになる。その後大阪に戻り、大正区の鶴町小へ赴任したそうだ。

その父が結核を患って転地療養することになり、一緒に母の里・小豆島へ移った。が二歳の誕生日(昭和八年三月)に父は他界。享年三十八だった。葬儀では大勢が集う光景を無邪気に喜ぶ自分の姿が人々の涙を誘ったという。

◆祖父母、叔父叔母の世話に

母は裁縫ができたが、一家の柱を失って、それだけでは食へて行けず、住み込みで働きに出た。そのため祖父母に預けられたが、学校では友だちと喧嘩ばかり、家でも「勉強は?」「学校でしてきた」と屁理屈が達者だった。祖父は白露戦争の話をよくしてくれた。



↑晩年に描いた自画像

小学四年生で大阪に戻り、太平洋戦争の最中、叔父・叔母の世話になりながら三先国民学校に通つ。勉強は嫌いでもハーモニカは好きだった。戦時の金属供出で取り上げられたのは悲しい思い出。そのハーモニカは今でも地域の高齢者向けイベントなどで童謡・唱歌などを吹いて喜ばれているが、楽譜が読めないため、いわゆる「揉り吹き」である。

◆祖父の尽力で坂出工業学校へ

卒業後、此花区の西島工業学校へ進むも喫煙がもとで退学処分。配給の煙草を家の者が吸わないのいいことに学校へ持ち込んでいたのだ。「こんな物騒な子、面倒みられへん」と叔母にも見放されて再び祖父母のもとへ。

祖父の尽力で香川県坂出の工業学校へ転校。終戦を挟んで五年間学んだ後、新設された高校の三年生に編入され、さらに一年間学んだ。

◆ベニヤ工場をついに

卒業後、大阪へ出て浪速区のベニヤ板製造工場に就職。昼休み、見回りに来た社長に「給料が安いから賃上げを要求しようと思つてます」と答えた予約線上がりの実直な一人がクビに

なったのに同調し、三人一緒にクビに。それでも社長はその後何かと援助してくれた。

◆臨時入夫で城東保健所へ

クビから一年後、開設を控えた城東保健所に職を得て、臨時入夫として日当三百四十円で働いた。工業学校で学んだことを生かし、色々な統計をとって円グラフや棒グラフに表わす仕事に携わった。

◆大正保健所での長期勤務へ

さらに一年後の昭和二十九年（一九五四年）、二十三歳で大正保健所へ移り、衛生害虫（ネズミ・ゴキブリ・ウジムシ等）駆除の仕事に就く。以後、平成三（一九九二年）の六十歳定年まで三十七年間勤めることになるが、一力所でこれだけ長期に勤められたのは、上司に反抗的で他に受け入れ先がなかったことと併せて、何かと面倒な問題の処理に重宝されていたことがある。

その一つがヤクザ対策だった。当時、保健所と暴力団とは浅からぬ関係にあったが、その葬儀や出所者の出迎へに「お前は小柄で目立てへんから」と参列させられたりした。

◆「管理職管理係」に

←「安治川内港」 1997年（水彩）



そんなこんなで長く大正区に勤務したため、地域のボスたちの特徴にも通じ、よく挨拶回りに行かされると共に、担当の管理職には「あの人は息子の話を」「この人は将棋の話題で場が持つ」「あの人は鉄砲に目が無い」などと吹き込んだ。それで同僚から「お前、一体何の係や」と問われた時、「管理職管理係や」と得意がって

いた。

とにかく好き嫌いがはつきりし、人前でも思ったままを口にした。また徒党を組むのが嫌いで、何かやる時は専ら単独で行動した。

◆演劇から絵に関わる

絵と関わったのはこの大正区時代だった。初めは演劇をやるつもりで思っていたが、台詞が覚えられないなど役者の見込みがないことから、演劇の指導者だった港保健所の高松伊久夫氏から「お前、裏方へ回れ」と言われて舞台装置の制作に移った。それが絵を描くきっかけだったが、それに絡んでこんなことがあった。

当時、結核撲滅に取り組んでいた保健所が啓発のため、主人公が結核で死ぬという筋書きの芝居をすることになった。それで大道具の布団や卓袱台を、当時既に住んでいた南田岡の現住所から担ぎ出し、稽古場である大正区の倉庫へ入るにつれた時、巡査に呼び止められた。「何してる」「泥棒に見えるか」「見える」「泥棒は持ち出すが、俺は持ち込んでる」「……」。

納得した巡査は立ち去った。

◆「モノづくり」

またこんなこともあった。確か三十代の頃、「キブリ浪治の啓発スライド制作を担当する」となったが、調べていくうちに「何万年も姿を変えず、食べたらず糞を残す。こんな正直もんはおらん」と「キブリに惚れ込み」「キブリは泣く」のタイトルでストーリーを考え、元絵を描いた。同僚の「キブリが泣くはずないやんけ」のいちゃもんに反発してトイレに籠り、「ム」「キ」「キ」と泣き声を練習していたら、「岸本は気が狂いよった」と大騒ぎになった。

◆妄想癖・賞嫌い・一匹狼

かよつに「事が万事、妄想癖もかなりのレベルだったが、そんな奇人を鷹揚に扱ってくれた当時の役所や上司には今も感謝している。因みに、かのスライドは各地で上映されて存外好評を博し、結局厚生大臣賞を射止めたのだから世の中は分らない。むしろその後口譚として「表彰式に出席するため 東京へ行け」「行かん。賞は性に合わない」とのやりとりがあったことも付け加えておへ。

そんな風に「賞」や「長」や「主人公」といった華やかなもの、中心的なものを厭う

性は蓋し生来のもので、それは、糧や栄誉は得られても何かと縛りのある「日展」などの組織に属さず、生涯一匹狼を決め込む絵描きとしての姿勢や画風に一番表われているように、自分でも思う。

◆大泉氏との出会いと別れ

そこで絵の話に戻る。大正保健所時代、先の高松伊久夫氏の勧めで画家・大泉米吉氏に師事し、絵画の基本を学んだ。が大泉氏四十代、自分が三十代の頃、ジャガイモを愛する老農夫を描いた絵に「農夫なら傍に鍬を描け」「ないものは描けん」「それは許せん」と激怒され、「そ



→「天保山」2000年(鉛筆スケッチ)

れならしいやない」と離反。「絵描きと教師は違う。しょせん大泉氏は教師」と決めつけた。大泉氏なりの考えと愛情もあったろうに、今から思えば随分失礼かつ身勝手な言動だったと反省している。因みにその『農夫』と題した二〇〇号の大作は第十三回現代美術展で「ターナー賞」を受賞した。賞嫌いには複雑だった。

◆自分流の画風で描き続ける

以後、「高快速道はいらん」「市役所の腐敗を何とかせい」など社会への鬱憤や警鐘は良いとして、「隙間に挟まったもん」「日陰に咲くもん」「けったいなもん」への愛着、というか執着を含めた自分流の画風で描き続けてきた。ただ保健所時代の同僚で大阪市職員・OBだった始めた「まいど美術展」は、今年(平成二十四年)で二十九回を数える。

世の中には芸術とか創造とか呼ばれるものが多々あるが、写真にしろ音楽にしろ、何やかやと決まりごとがある。が、とにかく絵だけは自由で、最初から最後まで何の制約もない。それが性に合っている。

平成二十四年夏〜冬 談

料理は人づくり

「なにわの名工」の日本料理人

室田大祐さんに訊く ①

優秀な技能者を大阪府が表彰する「大阪府優秀技能者表彰」(なにわの名工)に選ばれた築

港の日本料理人・室田大祐さん(四九)を職場に訪ねました。前では受賞の感想や、受賞につな

がった技術や地産地消への寄与について話して頂きましたが、さう今回は。

◆料理人として、また店主として、一日をどんな風に過ごしておられますか?

朝は七時に起き、九時に北新地スタッフを車で送り、あとは任せます。そのあと車で築港に戻り、デスクワークをしたり指示を出したりします。十五〜十六時ごろ、今度は地下鉄で北新地店へ向かい、その日の献立を指示。そのあとは店の者と一緒に板場に立ち、お客様を相手に調理・営業を続けます。二十一時半にいったん地下鉄で築港へ戻り、その後再び北新地へ車で

向かい、スタッフを乗せて二十三時〜二十三時半ごろ築港へ戻ってきます。デスクワークや車の運転などを除いた就業時間の内訳を一日単位で見ると、①献立の立て方の技術指導に

一時間②料理の仕込みの指導に二時間③接客や料理提供などの営業に三時間④食事マナーの指導に二十分といったところです。

◆忙しくも充実した毎日が伝わってきます。そんな中で楽しさを感じるのは?

やはりお客様の笑顔、そして「おいしかったよ」「また来るわ」などのお声、つまり目と耳が

「なにわの名工」に選ばれた日本料理人・室田大祐さん。優れた技術と共に後進指導への貢献なども評価された「築港の割烹の味」で



ら評価を頂いた時ですね。

◆逆に苦い辛さを感じる時は?

直接的に辛いのは朝起きる時(笑)ですね。

しかし仕事そのものを苦しいとか辛いとか思うことはありません。ただ、店の上に立つ者として「どう教えるか」は本当に難しいと感じています。特にお客様を前にして板場に立つ者は、ただ出来上がった料理の味や姿を味わってもら

うだけでなく、そこに至る手捌きに無駄がなく、調理員の扱いに清潔感を感じさせ、しかもその表情には余裕がなければいけません。さらに料理についてお客様と語り合えるだけの知識や世

間話のためのストックも求められます。そういったことをいかに伝えていくか、特に北新地店ではカウンターと調理スペースがフラット(平

ら)で、調理の流れが完全可視化(笑)されていますから、それに耐え得る、さらに高いレベルをいかにスタッフ全員が保持できるか、一番心を砕くところです。

◆教える難しさ、分かります。ところで受賞には家族の支えも大きかったと思いますが

特に女将である妻・栄子の支えが大きいです。

特

に女将である妻・栄子の支えが大きいです。

日本の四季や二十四節気を五感で味わえる。い

また「カイセキ料理」と一言で言いますが、「懷石」と「会席」はまるで違つのです。「懷石」は本来、仏教界の言葉で、禅院で温石を懷に入れて空腹を凌いだことから、一時凌ぎ程度の軽い料理の意味です。それに対して「会席」は本来、連歌・俳諧・茶の湯などの席のことです。

現在では宴席に出される上質で高級な料理を意味します。私たちはもちろん日本料理人として「会席」を目指していますが、その辺の違いが分からない料理人がいるのも現実です。

つまり、今言ったような違いを弁え、より深い料理の在り方を追求していかなければならないように、日本料理の難しさ・苦しさがあり、また楽しさ・快さもあってこそなのではないでしょうか。

◆納得です。そういう豊かで奥深い道を進む中、ゆめは料理人像といったものは？

私は自分の感性を大事にしたい、つまり、その時その場で感じたものを料理に表現したいと常々思っています。ですから、特に誰を目標にするかというよりはあります。室田大祐という人間を、料理を通じて味わってほしい、楽しんでほしいと願っています。

◆役者としての表現できなかった自分を料理でどう表現する。当面の目標を教えてください。

まずは、この春から両方の店の面倒をみるようになったので、それをきっちりやりこなすいじょう。また、やはりこの春には新人が入ってくる

ますので、彼らを育てることです。十年後に彼らがどう伸びているか、楽しみでもあり、まだ責任も感じます。それと、昨年から頂いた大相撲春場所の仕出しのお仕事を総力でやり抜き、多くの相撲ファンに喜んで頂くことです。

◆大変ですが、大阪のためにもぜひ頑張ってください。ではその先に「究極の目標」といつものがあれば、聴かせてください



→「料理は人づくり。世のため人のために喜ば

れる人材を育てていきたい」と室田大祐さん

（左は「割烹おんぎん」の料理長・小林豊さん）

料理は一人ではできません。チームで作り上げるので、メンバーの誰がミスをしたも良いものはできません。ですから料理というのは、結局は人づくりだと常々思っています。そして、その基本は、誰にも信頼をもって接すること。初めから百を望めば潰れてしまうので、まず六十〜七十を期待する。それで八十〜九十までの子もいれば四十〜五十しかできない子もいる。個性や能力、反応や結果はそれぞれ。それでも彼らが持つ料理への情熱や潜在能力への信頼を失わず、それらをまとめ、全体として完成された料理へと結実させていく。そして、そんな連携作業の中で成長した彼らがやがて巣立ち、それぞれの場で活躍する。単なる金儲けではなく、世のため人のために役立ち、喜んで頂く。そういう人づくりこそが、日本料理人としての究極の目標でなければならないと思っています。

◆感動的な言葉です。最後に、区民に向けてアピールしたい言葉があれば

特に港区民がという訳ではありませんが、日本では残念ながら食のバランスが崩れつつあります。昔の人の一生は「鯛」で始まり、鯛で終わ

港区民の手記をもとに、地元在住の作家・青木健一がつづる当地ドラマ。区内の地名や人名が登場しますが、総じてフィクションです。第一回は、戦争の悲劇を乗り越え、遅く生きてきた女性、村岡弥栄子の物語――。

弥栄子の空 (三)

（前編まで）九十を過ぎた弥栄子は墓参りの中で最初の夫・満雄との結婚当時を思い出していた。満雄は既に召集令状を受けていたが、新婚生活は夢のようだった。が、「この幸せが続きますように」との願いは半年後、満雄の入隊で破られた。二度の面会を経て夫が出征した後、弥栄子は父母のいる港区天保町に身を寄せた。が、戦争の影はその故郷をも覆っていた――

昭和二十年三月十三日、大阪市中心部に空襲襲があり、港区は東半分が焼き払われた。弥栄子らの住む西半分は難を逃れたが、弥栄子は母親と長男を連れ、知人の伝手で奈良県の田舎町へ疎開した。その後、大阪には六月にも大空襲があり、生まれ育った港町は無残にも壊滅した。

この六月空襲で焼け出された父と祖母も加わり、疎開先では農家の納屋に五人が起居した。配給だけでは足らず、農家と物々交換などをして何とか食べつないだ。十軒ほどから成る隣組は、戦時下の運命共同体の結び付きはあったが、弥栄子らは「よき声 扱いされ、溶け込みにくい辛さもあった」。

昭和二十年八月十五日、長かった戦争が終わった。が、夫の生死も知らされぬ弥栄子にとって、終戦はまだだった。疎開先での厳しい生活が続いていた昭和二十三年三月のある日、赤間文三大阪府知事から一通の公報が届いた。それは夫・山崎満雄の死に告知だった。「陸軍兵長山崎満雄 右は昭和十九年十月二十日 レイテ島アルベラで戦死」。既に死から三年三カ月がたっていた。



一人で遺骨箱を引き取つての帰り道、悲しみと共に「戦争さえなかったら死ななかつたのに」といつ悔しさ、三歳半になった長男・一馬を抱えて「これからどうしたらええの」という不安が込み上げ、入り混じって、何ともいえない気持ちになった。どこをどう歩いたかも分からぬまま、家にたどり着いた。骨箱には何も入っていなかった。

誠実で勉強家だった夫。面会で長男を抱いて離さなかつた夫。公報の戦死日が正確とすれば、日本を離れてわずか二カ月、どんな状況で、どんな思いで死んでいったのか――。

疎開先での生活に別れを告げ、父母、長男と共に港区の市岡に移つたのはそれから間もなくだった。四人の生活を支えるため、弥栄子と父が働いた。弥栄子は毎朝五時に家を出、職安で就業票を受け取り、大阪城などの現場へ、お金がないので歩いて向かった。それは道路整備などの失業対策事業で、仕事につけない日もあった。暑い日などに土砂や石を積んだモッコを二人一組でかつくのは、女にはきつい仕事だった。

幻想的な色彩美で魅了

区民ギャラリーでガラスアート展



→ 幻想的な色彩美が区民の関心を惹いた「ガラスアートNAOMI作品展」。写真は出品した生徒たち(左から坂尾、柏原、飛垣、田中さん)

幻想的な色彩美にうつとろり。「光と影」ガラスアートナカイグループ ガラスアートNAOMI生徒作品展」と題したガラスアートの展示会が二月二十五日～四月四日に港区民ギャラリー(港区役所一階)で催され、好評を博しました。

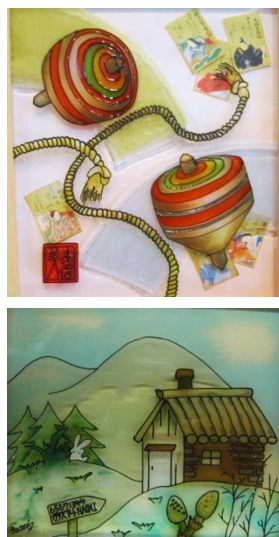
◆自由な発想と色づかいで

展示されたのは、港区を拠点にガラスアートの普及活動が続ける「ガラスアートNAOMI」の生徒作品十数点。「魚」「夢」「花」「滝」「傘」などを題材に、どの作品も自由な発想と色づかい、シンプルでくつきりした縁取りで描かれ、幻想的で童話的な雰囲気を感じさせていました。

展示にはガラスアート歴二十一年、同教室を開設して十七年という金元奈保美さんも自作を出品。そのうちガラスアート「昔の遊び〜駒」は百人一首の札(たむ)などを背景にカラフルな駒や紐をバランスよく配して日本の正月の長閑さを、また「ガラスアート 春よ来い〜」は淡緑を基調にした山野と茶系でまとめた田舎家のほどこよい対比で日本の春のほのぼの感を、それぞれ表現し、来場者の目を惹き付けていました。

◆ルーツは江戸の手描き友禅

← 金元奈保美さんの作品から「ガラスアート昔の遊び〜駒」と「ガラスアート春よ来い〜」



ガラスアートのルーツは江戸時代の京の絵師によって開発された京都手描き友禅。その伝統技法に着目した創始者の中井芳夫・アツコ夫妻(ガラスアートナカイ本部主宰■箕面市在住)が一九八六年、一枚のガラスに描く技法と画材を開発し、「ガラスアート」と名付けました。

作品の幻想感・透明感に加え、①色は三原色と白・黒・銀の計六色②筆の代わりに竹串一本③パレットはプラスチックカップ二個④というシンプルでユニークな技法が好評。生涯学習に最適」と愛好者が増えています。

ガラスアートNAOMI 磯路二二〇ー

九・一〇〇四、☎六五七六・一三四四。五月十六～十八日にも池田市で作品展(次号に案内)。

精緻な筆づかいに感嘆

区民ギャラリー「町の画家」が展覧



→ 精緻な筆遣いに感嘆の声が上がった濱崎和則

さんの個展＝3月中旬、港区民ギャラリー（写

真）は連作「鶴の舞い」に見入る来場者

「町の隠れた名画家」として知る人ぞ知る
濱崎和則さん（七〇）（田中二丁目在住）が、描き

ためた絵を三月十一～十九日、港区役所「港区
民ギャラリー」に出品し、好評を博しました。

◆女性美への憧れ

展示されたのは風景・動物・人物・静物など
の油絵十数点。このうち特に注目を集めたのは
「鶴の舞い」と題した「連作」でした。黄色をバ
ックに鮮やかな紺とピンクの着物をひるがえす
花魁の姿はまさに鶴を思わせるあでやかさ。も
はや見ることが叶わぬ女性美への憧れとも郷
愁ともつかぬ作者の気持ちがひしひしと伝わっ
てきました。

◆水の都への愛着

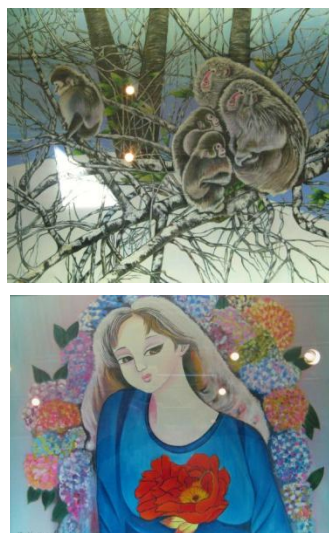
また「水門の静寂」と題した「点は毛馬の閘
門と港区の三十間堀の水門付近を描いたもの。
緻密に描き込まれた水門と船の構造、水色の深
さと波の白さの対比。これから、水の都・太
阪や郷土・港区への深い愛着が感じられました。

◆日本画的な味わい

この他、パリ近郊の運河の電話的な雰囲気か
印象的な「水に浮かぶ古都」、冬枯れの木立で身

「猿たちへのまなざしも温かな「日本猿の親子」

①と、少女と紫陽花を重ねた「紫陽花」②



を寄せ合う猿たちへのまなざしも温かな「日本
猿の親子」、枝に休む小鳥たちの繊細な愛らしさ
を強調した「山茄子と柄長」「柿と鴨」、少女の
可憐さと紫陽花の清楚さを重ね合わせた「紫陽
花」、金魚と紫陽花を隔てる水面の透明感が涼し
さを誘う「紫陽花と金魚」など。そのどれもが
精緻な筆づかいで細部まで丁寧に描かれ、油絵
ながら日本画的な味わいを醸していました。

◆独学で研鑽を重ね

濱崎さんは工務店を経営していた頃、戯れ
に描いていた鉛筆画を「上手やなあ」と感心さ
れたことから絵画の楽しみに目覚め、六十三歳
で会社を息子に任せた後、自宅三階をアトリエ

として本格的に描くようになりました。師も持たず、独学で研鑽を重ねていましたが、画材購入先である日本美術協会がその画才に着目、財団法人国際文化レシジ主催の展覧会に応募するよう濱崎さんに勧めました。同展は毎年、東京・六本木で開催され、応募作品が年間二万二千点を超える、国内で最大級の絵画イベント。濱崎さんはこれにさっそく応募し、見事入選。以後八年間、毎年応募を続けながら、回を追って受賞ランクを上昇させています。

◆これからも楽しみながら

昨年は地元・井田町オークの画廊で初の個展を開き、十七点を出品しましたが、全て完売。今回はそのうちの何点かを借り戻し、それらも合わせて展示したいと思っています。

描くのは専ら油彩ですが、独特の繊細・細密なタッチは「ペンティングオイルを多めに配分して絵具の伸びを良くする」とことで得られるとか。「これから焦らず、自ら楽しみ、皆さんにも楽しんで頂きたい」を第一に、一点一点丁寧に描いていきたい」と意欲を燃やしています。

ミニミニ案内

●交通科学博物館企画展「画かれた鉄道」錦絵・引札・双八・鳥瞰図の中の鉄道」 景色

や人物、物などを人に伝える「錦絵」「引札」「鳥瞰図」などから、鉄道や乗り物をモチーフに描かれた明治初期～昭和中期の作品を一堂に紹介。錦絵（浮世絵）では「都名所別品鏡 長谷川貞信（二代）」「写真左」など、引札（パンフレット）では「フムネ器械製造会社」「諸千菓子掛物類製造卸非常勉強」など、双八では「空中汽車行双八」「世界漫遊双八」など、鳥瞰図（空から全体を俯瞰して描かれた地図）では絵師・吉田初三郎の作品など、絵葉書では同館所蔵から一二六名の資料を展示。五月二十八日まで開催中



↑錦絵「都名所別品鏡 長谷川貞信（二代）」

←収蔵資料写真展から「EF81形交流電気機関車①」と「EH10形直流電気機関車②」



▽他に「収蔵資料写真展」二菱重工業寄贈車両写真より「機関車など約二十点を展示」「写真右の2点、五月三十一日まで開催中」「お色し列車と貴賓室（皇族が乗る鉄道車両に関する資料を展示。七月七日まで）などの催しも▽十、十七時入館、月曜休館祝日なら開館し翌火曜休、火曜も祝日なら振替休なし、春・夏休みは開館。高校生以上四百円、四歳～中学生百円。JR井田駅すぐ。 〇六五八ー・五七七ー。

●関西フィルハーモニー管弦楽団「第247回定期演奏会」 「二人のリヒャルト…夕映えのロマンと濃厚な愛のドラマ」と題し、リヒャルト・ワーグナーとリヒャルト・シュトラウスの「愛

“が詰まった名作を贈る。妻「シマへの愛情にあふれ、幸福が晴れやかに舞い上がる、ワーグナー「ジークフリート牧歌」。最愛の妻ハウィーネへの想いが垣間見える「シユトラウス四つの最後の歌」。透明な叙情美が心を打つ、シユトラウス「13管楽器のためのセレナーデ」愛木長調作品。愛の官能や刹那をも含む、シユトラウス「ばらの騎士」組曲作品。指揮はヴァイオリニストでもある服部謙一「賞賛上」©ackworth pics)、歌唱は元ウィーン国立歌劇場専属歌手のソプラノ・佐々木典子「同下。五月三十日(木)十九時からザ・シンフォニーホール(JR環状線「福島駅」から北へ歩約七分)で十八時四十分から指揮者プレトーク。S席五千元、A席四千元、B席二千元、学生席千円(全席指定・消費税込)。☎八五七七・一三三八。



●港図書館 ①春のこども会く子ども読書の日

記念事業「四月二十九日(月祝) 十時半〜十一時半に港区民センター会議室「橘」で。「絵本の会みなど」による絵本の読み聞かせ、パネルシアターなど。幼児から小学生。申込不要。当日先着四十名②「三」図書展示「恐竜(きょうりゅう)だいき」展「五月三十一日(金)まで開催中。大阪市立自然史博物館で特別展として「発掘!モンゴル恐竜化石展」が開催されているのにちなみ、子どもから大人までみんなを夢中にさせる「恐竜」の本を展示③図書展示「あなたにこの本を」展「四月三十日(火)まで開催中。大阪市立図書館が購入した新刊本から図書館員おすすめの本を紹介。リスト配布も④おたのしみ会「幼児を対象に毎週水曜十五時半から十八時、じゅうたんコーナーで。絵本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアター、手遊びなど。申込不要⑤あかちゃんのおたのしみ会「赤ちゃん」と保護者を対象に、いつもは毎月第一金曜だが、五月だけ第三金曜(十日)の十一時〜十一時半にじゅうたんコーナーで。赤ちゃんが絵本に親しめるよう工夫。申込不要」☎八五七

六・一三四六。

●弁天町市民学習センター「きょうみ芸一日体験」

プレゼントにピッタリの小さいマグネットを作る。五月十四日(火) 十四〜十八時。講師は本根富美子さん。定員 十名多数抽選。受講料二百円(教材費含む)。持ち物はハサミ、目打ち(あれば)。申込は①往復はがき(講座名・氏名・住所・電話番号・返信用に宛名)②来館(官製はがき持参)③インターネット(「いちようネット」で検索)のいずれかで(五月九日締切)。詳細は同センター(〒552-0007 大阪市港区弁天1-2-2・700オーク2番街7階、☎八五七七・一四三〇)へ。

●弁天町市民学習センター「こころのうた」

「こころのうた」『春』を謳(うた)ぐ。次世代へ歌い継ぎたい日本の歌を、本格的なオペラ歌手の歌声と共に、背景やエピソードを学びながら楽しむ「シリーズ・レクチャア・コンサート」。第一回は、春から初夏にかけての歌の数々。出演はソプラノ：小椋史絵、バリトン：橋茂、ピアノ：金岡優子。企画・構成・司会は大田道宏(関西フィルハーモニー管弦楽団チエロ奏者)。曲目

は「春が来た」「やぐらやぐら」「花」「花の街」「めだかの学校」「からたちの花」「みかんの花咲く丘」他。四月十九日(金) 十九時から同センター講堂で。料金は一般十五百円(前売千二百円)、小・中学生八百円。定員百二十名(先着順)。申込は①来館で前売チケット購入②電話予約(氏名・住所・電話番号)③インターネット予約(「いちよふネット」で検索→「講座・イベント情報」→「音楽」→希望の講座を選んで申込)のいずれかで。詳細は六五七七・一四二〇同センターへ。

●**弁天町市民学習センター・弁天シネマ倶楽部**

『**真昼の決闘**』 「心に残る名作映画を低料金で多くの市民に」と同センターが企画した上映会の二十八回目。保安官は無敵のヒーローという西部劇の常識を覆し、暴力を恐れる普通の人間として描いたヒューマンドラマ＝写真は一場面(上は主演のグレイ・クーパー、下右はグレース・ケリー)。一八七〇年、ハドリー・ビルという小さな町。結婚式を挙げたばかりの保安官ウィル(グレイ・クーパー)はその日限りで退職する予定だったが、かつて逮捕した無法

者が正午の列車で帰還すると知らされる。思い悩んだ末、対決を決意するウィル。新妻エミー(グレース・ケリー)は「正義より命が大事」と説得するが、彼の意志は固く、エミーは一人町を去ろうと駅へ向かう。ウィルは仲間を求めて炎暑の町を歩き回るが、住民たちは様々な事情で協力を拒む。やがて正午となり、駅に列車が到着。エミーが乗り込むと同時に、復讐を誓う無法者が降り立った。四人の悪党を相手にウィルの孤独な戦いが始まった。人間味と緊迫感溢れるストーリー、劇中時間と上映時間をシンクロさせた実験的手法、キャスティングの妙、主題歌『ハイヌーン』の魅力などからアカデミー作品賞の最有力とされたが、当時の「赤狩り」の影響で『地上最大のシヨウ』に敗退した



とされる。監督はフレッド・ジンネマン。出演は他にトーマス・ミッチェル、ケティ・フッド、リー・ヴァン・クリーフら。一九五三年アメリカ作品。モノクロ、八四分。五月十八日(土)十時と十四時から講堂で。料金は一人一回八百円。定員は各回先着百名。当日十一時生ごころからロビーで無料ライブを予定。問い合わせは六五七七・一四二〇同センターへ。

●**「芽の云」作品展** 港近隣センター(八幡屋

の絵画教室で絵を学ぶ生徒たち九人(井上順子、井上節子、中村民子、仁木公一郎、濱中和子、林いすず、丸山和美、村古純子、村古高士さん)の風景画などを一堂に展示する恒例展。十三回目。五月十一日(土)～十九日(日) 十一～十八時、みなと通の画廊「ガレリア・リバリア」で。同画廊は平和の願いをキャンバスに込めて絵画人生を送ってきた八幡屋の川島恵美子さん(八二)が絵画人生の集大成や今後の活動拠点、次世代への橋渡しの場として二〇一二年十一月オープン。三先一・一三三・一八みなと通沿い、地下鉄朝潮橋駅すぐ、六五七五〇一・四二八八。